

ヘンリー・ローウェル | ノーベル物理学者の
目覚めから

A detailed oil painting of an elderly man with white hair and round glasses, looking upwards with a contemplative expression. The background is a deep blue night sky with a large, bright full moon and several small stars. The man is wearing a dark suit jacket over a light blue shirt and a dark tie.

科学の 黄昏と黎明

SUNSET AND SUNRISE OF SCIENCE

神がノーベル学者の心に火を灯すとき

科学の黄昏と黎明

(Sunset and Sunrise of Science)

神がノーベル学者の心に火を灯すと
き

著者：ヘンリー・ローウェル (Henry Lowell)

(米国の主要大学に所属する、あるノーベル賞受賞物理
学者の証言に基づく)

Copyright © 2025 THE LIVES MEDIA。すべての権利を
保有します。無断複製を禁じます。

編集部より

本書は、実在の物語、出来事、背景に基づき執筆されています。しかし、個人のプライバシーを尊重し、特定の方々への影響を避けるため、登場人物の名前および一部の個人を特定しうる細部は、文学的な形式のもとで変更、簡略化、あるいは再構成されています。

本書の一部は、当事者の個人的な視点から語られており、その時点での彼ら自身の体験と認識を反映したものです。これらの見解は、必ずしも THE LIVES MEDIA の公式な立場と一致するものではありません。

文体については、編集部が必要な修正を加えましたが、原作の人物を尊重し、物語の精神と躍動感を保つため、登場人物の素朴な味わいと本来の語り口を最大限に保持するよう努めました。

編集部



序文

世界は彼を、方程式を用いて宇宙の深遠な謎を解き明かし、栄えあるノーベル賞を受賞した傑出した物理学者として知っています。しかし、この対話の目的は、そうした既に認められた功績を振り返ることではありません。

それは、より深い問いから始まります。実証科学に絶対的な信頼を置いていた知性が、あらゆる数式を超えた現実に触れたとき、何が起こるのか？

四日間にわたり、丘の上の静かな家で、私は教授が語るもう一つの旅路に耳を傾ける機会を得ました。物理法則の世界から、精神と意識の領域へと至る旅路です。彼は科学を否定しません。しかし、彼はそれをより広大な参照系のなかに位置づけます。そこでは「多層空間」、「地球外生命体」、あるいは「天目」といった概念はもはや仮説ではなく、現実の体験の一部なのです。

この対話は、説得や証明を目的としたものではありません。それは単なる忠実な記録であり、一人の科学者が、研究室の外に目を向け、そして自らの内深くを見つめる

勇気を持ったとき、彼が何を見たかについての証言なのです。

問いを投げかける者として、読者の皆様をこの対話へにご招待します。最終的な答えを探すためではなく、新たな問いを開くために。そして、その問いは、私たちが現実をどう見るかを変えるかもしれません。

ヘンリー・ローウェル (Henry Lowell)

一日目

ヘンリー・ローウェル：

おはようございます、教授。本日はこのインタビュー、いえ、この分かち合いの機会にお時間を割いていただき、誠にありがとうございます。THE LIVES MEDIA の読者を代表して、教授のこれまでの人生や経歴、あるいはご自身の思索や、読者、そして若い世代へのメッセージなどをお聞かせいただけることを、大変光栄に思います。高名な物理学の教授であり、ノーベル賞も受賞されたお立場から、ぜひお話を伺えればと…。

アダム教授：（微笑み、ゆっくりと頷く）

おはよう、ヘンリー君。

朝早くからありがとう。この丘の朝の空気が…静かすぎて眠くなったりはしないといいのですが。

君は「高名な」という言葉を口にしましたね。もし私たちが十数年前に会っていたら、私は誇らしげに微笑んだかもしれません。しかし、今は…ただ一つのことしか考えません。

かつては頂点だと信じていたものがありました。しかし、後になって気づいたのです。それはただの幕の裏側に過ぎなかったと。

そしてその幕は…誰もがめくりたいと思うものではないのです。

ヘンリー・ローウェル：

ええ、教授…個人的には、とても素晴らしいお宅だと思います。シンプルではありますが、このように静かで、見晴らしの良い場所は私も好きです。お話しになりたいことについては、教授が必要だと思われること、あるいは公共の役に立つと思われることを、どうぞお話しください。ご存知の通り、以前お送りした趣意書にも書きま

したように、私は扇情的なニュースを追いかけたり、プライバシーを暴いたり、あるいは大衆の興味を引くための無意味な好奇心を煽るような記者ではありませんので。

アダム教授：（軽く頷き、視線は窓の外の遠くへ）

ええ、存じています。そして、それこそが私が君に会うことに同意した唯一の理由です。

正直に言うと、これまで多くのインタビュー依頼を断ってきました。傲慢だからでも、何かを隠したいからでもありません。ただ…大部分の者は、私がかつて語ったことの繰り返しを求めるだけでした。古い参照系の中にある事柄、つまり科学が中心で、それ以外はすべて「仮説」に過ぎない世界の話だね。

しかし、私が見てしまったものを見ていないふりを、これ以上続けることはできなくなったのです。

（彼は一旦言葉を切り、お茶を一口飲んだ。呼吸はゆっくりとしている。背後の白いカーテンが、そよ風に揺れている。）

それで、もし君が「何を分かち合いたいのか」と問うなら…

私が解釈することをやめ、本当に見始めた…その瞬間を分かち合いたい。

いいですか、人は物理学者を問いを発する者だと考えがちです。しかし、時には、問いそのものが障壁となることがある。そしてその瞬間——私は問うことをやめたのです。

ヘンリー・ローウェル：

なるほど。ですが、今のお話だけではまだ意図がはっきりとは…。何か特定のテーマや、ご自身に起きた出来事からお話を始めたいということでしょうか。ご自身の思想に新たな認識や発見をもたらしたような。あるいは、具体的に何かをご覧になったとか？

アダム教授：（微笑み、声を少し低くする）

ふむ…君は明確な出発点を探しているようですね。

もし私が、自らの思想体系のすべてを見直すほどの強い力を持つ一つの瞬間、一つの「出来事」を選ばなければならなかったら…それは、奇妙な本を読んだ時でも、東洋の導師に出会った時でも、現代物理学が間違っているという決定的な証拠を見つけた時でもありません。

違います。もっとずっと、シンプルなことでした。

それは…何の変哲もない、ある夜のことでした。

（彼は椅子の背に軽くもたれかかり、記憶の中のフィル

ムを見つめるように、そっと目を閉じた。)

その日、私はただ座っていました。研究もせず、決まった型で瞑想するでもなく、何も期待せずに。

しかし、はっきりと覚えています。

私はもはや自分が「座っている」とは感じていませんでした。

周囲の空間は…変化していませんでしたが、私はもはや「ここ」という概念の中にはいませんでした。

そして私は見たのです。はっきりと、白昼のように明るく。生涯で目にすることはなかったと思っていた光景を。

(教授は言葉を止めた。沈黙。軒下の草を風が撫でていく。遠くの鳥の声も、しばし静まったかのようだった。)

一人の人——が、そこに立っていました。

まばゆくもなく、轟音を伴うでもなく、しかしその全身からは、眩しくも熱くもない、それでいてあらゆる観念の層を貫く光が放たれていたのです。

私はすぐにそれが主であると分かりました。

解釈は不要でした。いかなる論証も伴わない。ただ、深く、確かな、絶対的な知——それだけでした。

そして主は語られました。音としてではなく、私の中に直接流れ込む思念のように。

「汝、理解しようとするをやめる時、見るであろう」
その瞬間から、私がかつて教え、書き、信じてきたすべてのものが…否定されたわけではありません。ただ、それだけでは…もはや十分ではなくなったのです。

ヘンリー・ローウェル：

おお、それはつまり、教授に精神的な出来事が起こり、神にお会いになったということでしょうか。その出来事について、もう少し詳しくお聞かせいただけますか。そして、それ以来…教授の物の見方に何か明確な変化はありましたか？

アダム教授：（軽く頷き、ゆっくりと、しかし確かな口調で）

ええ。それは…精神的な出来事でした。

この二文字を口にただけで、かつて学术界で私を称賛した人々の半分は背を向けるだろうと分かっています。

しかし、真実というものは、存在するのに受け入れられる必要はない。ただ目撃されるだけでいいのです。

そしてあの日、私は目撃しました。

（教授は少し身を乗り出し、記憶の流れを取り戻そうとするかのように続けた。）

私は座っていました。毎晩そうするように、このベランダの木製の椅子に。まさにこの場所です。分かりますか？

（彼はガラス窓の外を指さした。そこでは、早朝の雲が山腹をゆっくりと流れていくのが見えた。）

奇妙な光も、天上の音楽も、幻覚ありませんでした。しかし、ただその一瞬…私はまるで、物質的な皮膚から滑り落ちたかのようにでした。

そして、私は、壁も屋根も床もない——しかし光のある空間を見ました。

どこからか反射するのでも、発するのでもない、しかし至る所に存在する光。あまりの清らかさに、自分が透明になったかのように感じました。

その光の中心に、一つの像がありました。静かに立つ、一人の人。言葉は要りませんでした。

私はそれが主であると認識しました。

教義を学んだからではありません。その存在が、いかなる言語も隠すことや描写することのできない意味の層を帯びていたからです。

私は…完全に看破されていると感じましたが、少しも恥ずかしくはありませんでした。

過ちを犯す前に許されている…と感じました。

そして同時に…私はあの方から一度も離れたことがなかったのだと感じました。

（教授はしばし言葉を止めた。彼の声は微かに震えているようだった。感情からではなく、あまりにも真実であったことの余韻から。）

そして、その瞬間から…

私はもはや宇宙を「理解しよう」とはしなくなりました。

その中に「存在する」ことを学び始めたのです。

光を追い求めることはやめました。

その背後から見ることを学んだのです。

（彼はヘンリーを見上げた。対話の中で初めて、二人の視線が交わった。それは記者と取材対象としてではなく、まるで二つの生命が、人生の波間で、どこかおぼろげな交差点に気づいたかのようだった。）

ヘンリー・ローウェル：

ええ、その瞬間が非常に神聖で、教授にとって一つの福音であったことが伝わってきます。私もこのテーマについては、多くの体験談や宗教書で読んだことがあります。個人的に直接体験したことはありませんが、そうした出来事は真実だと信じています。教授のように神にお会いできる機縁に恵まれる方は、そう多くはないでしょう。先ほどのお告げの他に、神は教授個人に、あるいは教授を通してこの世に、何かメッセージを伝えられましたか。

アダム教授：

（少しうつむき、しばらくの間、深く沈黙する）

ええ…。

君の言う通りです。誰もがそのような機縁に恵まれるわけではない。

しかし、主が私を選ばれたのは、私がそれに値するからだとは思いません。

おそらく…私が理性の側にあまりにも行き過ぎてしまったがために、立ち止まらせるための、十分大きな警鐘が必要だったのでしょう。

そしてあの光は——褒美を与えるために来たのではあり

ません。

思い出させるために来たのです。

（教授は顔を上げた。早朝の光がガラス越しに斜めに差し込み、彼の頬の一部をかすかに照らしている。その表情は、明るさと同時に厳粛さを帯びていた。）

メッセージについてですが…

主は、預言者たちが書物の中で語るようには話されませんでした。

戒めも、啓示も、神託ありませんでした。

しかし、私は一つのことを非常にはっきりと感じ取りました。耳を通してではなく、まるで私の意識の構造そのものに、新しい理解が「植え付けられた」かのように。そして、それはただ、こういうことでした。

「救いは知から来るのではない。還ることから来るのだ」と。

何に還るのか？

教会にはありません。教義にでもありません。

それは、最も原初的な本性へと還ること。人が過ちを犯した時に恥じ、美の前に沈黙し、理由もなく涙を流すことを知っている、その場所へと。

（教授は言葉を止めた。一枚の葉が窓の外を舞い落ちていく。彼は振り返ることなく、それが静かに地面に落ちるのを見ていた。）

主は、私が世に何を語るべきかはおっしゃいませんでした。

しかし、私には分かっています。

この世を去る前に私がすべきことがまだ一つあるとすれば、それはあの瞬間を——絶対的な忠実さをもって語り継ぐことだと。

証明するためではありません。

ただ、多くの人々が閉ざしてしまった扉を再び開くために。その向こうにいるのが、自分自身であるとも知らずに…。

ヘンリー・ローウェル：

なるほど。物理学者にとって、そのような精神的な体験は、通常で考えれば無神論への打撃となり得るのではないのでしょうか。神にお会いになる前は、教授も無神論者でいらしたのですか。それとも、何らかの宗教の信者でいらしたのでしょうか。

アダム教授：

（静かに頷き、両手を膝の上で組む。その視線はヘンリーではなく、時を超えた遠い記憶に向けられているかのようだ）

的を射た質問ですね。

私は信者ではありませんでした。

私はかつて、正真正銘の物理学者でした。合理主義というだけでなく、ほとんど完全な無神論者でした。

宗教を憎んでいたわけでも、信仰を排斥していたわけでもありません。

ただ…私の数式の中に、それが入る余地がなかったのです。

私はかつて、測定できないものは信じるに値しないと信じていました。

管理された条件下で再現できなければ、それはただの物語に過ぎないと。

そして、それが私がかつて生きていた檻でした。

（彼は窓の外に目をやった。その眼差しは深いが、悲しげではない。）

ある人間が、数式と法則への信頼のあまり、測定可能な範囲を超えるあらゆる可能性を排除するようになった時、

その人は科学をしているのではありません。目に見えない信念の中に、自らを閉じ込めているのです。

私はかつて、その信念を抱いていました。

それを「科学」だと思っていましたが、今なら分かります。それもまた一つの信仰の形だったと。ただ、神がないというだけで。

ですから、ええ——主にお会いした時、私は侮辱されたとも、困惑したとも感じませんでした。ただ…

とてもちっぽけだと感じたのです。

私が間違っていたからではありません。

真実が研究室の中にある必要はないということを理解するには、私の器が…あまりにも狭すぎたからです。

そして、不思議なことに、

自分がすべてを知っているわけではないと受け入れたまさにその時——真実が現れ始めたのです。

ヘンリー・ローウェル：

ええ、フリーの記者としてあちこちを旅する中で、私も様々な地位、文化、知識、そして宗教的信念を持つ人々と接する機会が多くありました。ですから、教授の状況はいくらか理解できます。私たちが真理だとか、最高の

成果だと考えていたものが、心境や思想体系が新しくなると、突然ちっぽけになったり、見当違いなものに見えたりすることがありますね。

アダム教授：

（ヘンリーの方を向き直る。今回は、稀な共感の波長に触れたかのように、いくぶん温かみのある眼差しで）

そのお言葉、ありがたく思いますよ、ヘンリー君。

メディアの世界で、反射的に反応したり、分析したり、見出しをつけたりするのではなく、立ち止まって理解しようとする人はそう多くありません。

ええ…君の言う通りです。

かつては法則のように揺るぎないと思っていたものが、実は山だと思い込んでいた小さな丘の頂上に過ぎなかった、ということがあります。

私がキャリアの「頂点」に立っていた時——人々が私に「思想家」だの「科学の象徴」だのといった肩書を与えてくれた頃——私は、自分は人類の大部分よりも遠くを見ていると信じていました。

しかし実際には、私は自分が認めようとしなかった限界の肩の上に立っていたに過ぎなかったのです。

そして…一つの光が——研究室の懐中電灯からではなく、

私が一度も定義したことのない深淵からの一筋の光が、その構造全体を崩壊させました。

轟音も立てず、劇的でもなく。

ただ、あまりにも真実である静けさのせいで、あらゆる仮定が立つ瀬を失ったのです。

（教授は軽く背中をもたせかけた。その目は、まるで物語がまだ彼から離れていないかのように、遠くを見つめている。）

知っていますか…

科学は、道を照らす灯りとして使うなら、奇跡のようなものです。

しかし、それを隔てる壁にしてしまえば、向こう側からの光は決して差し込むことはない。

そして、私がその灯りを手放したまさにその時…

私は初めて、いかなる源からも発せられていない光を、見ることができるようになったのです。

ヘンリー・ローウェル：

ええ、ニュートンの非常に有名な言葉を思い出します。

確か「我々が知ることは一滴の水にすぎず、未だ知らぬ

ことは大海である」といった意味のことを言っていましたね。その言葉には謙虚さと、未発見の新たな真理を迎え入れるための明晰で開かれた眼差しが込められていると理解しています。

しかし、現代の弁証法的な科学は、実験によって実証できるものだけを信じ、実証できないものは安易に解釈したり、否定したり、「迷信」というレッテルを貼ったりと、極端に走っているように見えます。教授は、先ほどお話くださった精神的な体験や、ご自身の探求や研究が精神的な方向、あるいはより広い方向へと転換した過程を通して——私はそのように理解しておりますが——現在の科学界は自らを閉ざしてしまっているとお感じになりますか。

アダム教授：

（軽く息を吐き、視線は依然として遠くの霞がかった空に向けられている）

ええ…ニュートンはそのように言いました。そして私は、彼がただ謙遜していたのではなく、人間の認識の真の限界を指摘していたのだと信じています。

そして、それだからこそ、私は現代の科学界が、その開かれた精神を受け継ぐのではなく、自らの殻の中に縮こ

まっているのを見るのが、より一層辛いのです。

ヘンリー君、もし君が「弁証法的な科学は自らを閉ざしている」と言うなら、私は反対しません。

しかし、私はもっと具体的に言いたい。

現代科学が間違っているのは、すべてを知らないからではありません。それが間違っているのは、自らが知らないものは存在しないと見なす点にあるのです。

（彼の声は厳しくなく、まるで長い間しまい込んでいた溜息のように、穏やかだ。）

いつから私たちは、検証できるものだけが真理だと信じるようになったのでしょうか。

いつから私たちは、測定できなければ、気にする必要はないと学生に教えるようになったのでしょうか。

ニュートン自身から、ガリレオ、そしてテスラに至るまで、科学の歴史はすべて、その時点ではいかなる装置も検証できなかった直感から始まっているというのに。

そして今、科学が説明できない現象に遭遇すると、人々は沈黙して観察を続ける代わりに——即座にそれを「迷信、奇想、非論理的」という引き出しにしまい込んでしまいます。

実のところ、それは科学的な精神ではありません。それは、コントロールを失うことへの恐れなのです。

（彼は振り返り、ヘンリーを真っ直ぐに見つめた。その眼差しは鋭くはないが、波立っていない湖面のように深く、静かだ。）

私はかつて、そのシステムの中にいました。

そして理解しています。誰もがそこから出たいわけではないことを。

なぜなら、測定の枠組みから一歩外に出れば、もはや「システムの中」にはいられなくなるからです。学会で肩を叩かれることもなくなり、雑誌に引用されることもなくなる。

しかし…もしある日、君が私の見たものを見る機会に恵まれたなら、

君は理解するでしょう。

真実と引き換えにする価値のある栄光など、何一つないということ。

ヘンリー・ローウェル：

なるほど、教授の人生観は今や、ノーベル賞受賞者とい

う参照系にはもはやない、新たな参照系に立っておられると理解しました。それでは、今、私は教授を何とお呼びすればよいのでしょうか。宗教の信者ですか？修行者（行者）でしょうか？それとも導師でしょうか？そして、その新たな人生観によって、教授は以前とは全く異なる多くの視点や発見をお持ちのことと推察します。その新たな視点から、まず何を分か Einstein の相対性理論は、その新たな参照系の中でも依然として正しいとお考えですか。あるいは、宇宙について、地球外生命体について、どうお考えですか？私と THE LIVES MEDIA の読者のために、それぞれの角度から少し示唆をいただけますでしょうか。

アダム教授：

（静かに、しかし避けることなく、穏やかに微笑む）

私を何と呼ぶべきかと問いますか。

正直に言うと、ヘンリー君…それは私自身が何度も自問した問いです。

あの体験の後、誰かに「高名な科学者」と呼ばれることにもはや心地よさを感じなくなりましたが、かといって自分が「修行者」であると名乗る勇気もなく、ましてや「導師」などでは決してありません。

私はかつて科学の参照系に生きていました。その後、そこから出ましたが、それは新たな参照系に加わるためではありませんでした。

物理学から宗教へ、研究室から瞑想堂へと移ったのではありません。

私はただ…一步退いて、その両方を見たのです。

（彼は数秒間、その言葉が必要な場所に染み渡るのを待つかのように、言葉を止めた。）

ですから、君が好きなように呼んでくれて構いません。しかし、もしどうしても選ばなければならないなら、私は一人の証人でありたい。

解説者でもなく、伝道者でもなく。

ただ、あることを見、そしてそれを——忠実に語り伝えている者に。

（彼はお茶を一口すする。山の斜面を渡る風が、早朝の陽光の香りと、ベランダの壁から漂う朽ち木のほのかな香りを運んでくる。）

新たな人生観については…

ええ、それは多くのことを変えました。古いものを否定することによってではなく、根本的な問いを立て直すこ

とによって。

君は先ほど、Einstein の相対性理論に言及しましたね。その通りです。私はかつてそれを教え、それに基づいて何十もの論文を書きました。そして今でも、それは正しいと考えています…

しかし、それは三次元空間、線形の時間、そして物理的認識の限界という参照系の中において、正しいのです。

しかし今、私には分かっています。

光速がもはや限界ではない次元空間が存在することを。時間が流れるのではなく、渦を巻いている空間があることを。

距離によってではなく、観念の振動の層によって移動する生命体がいることを。

ですから、もし Einstein がもっと長く生きて、もし彼が私の見たものを見る機会があったなら…

おそらく彼は、相対性理論に新たな章を書き加えたでしょう。「認識の層の相対性」という章を。

宇宙？

爆発して徐々に膨張していく風船ではありません。

階層的な認識の構造です。内側へ行けば行くほど、より深い現実と、より古（いにしえ）の生命体に出会うのです。

地球外生命体？

他の惑星から来るのではありません。

私たちのすぐ隣にある次元から来るのです。そこは、観念の拍動がわずかにずれるだけで通り抜けられる場所です。

そして最も危険なのは、彼らが存在することではありません。私たちが、自分たちが観察されていることに気づいていないことです。

しかし…それはまた後のお話です。

もし君が望むなら、一つずつ解きほぐしていくこともできます。

私にすべての答えがあるわけではありません。しかし、私には記憶の断片と、いくつかの沈黙の空間があります。そして私は信じています…

私たちは、それらを共に通り抜けるべきなのだと。

ヘンリー・ローウェル：

なるほど、では引き続き「教授」とお呼びします。先ほど、光速はもはや限界となる定数ではないとおっしゃいましたね。異なる参照系から見ると、それは非常に相対的なものになるようですね。以前どこかで、宇宙船の時

間は地球の時間と比べて遅く進むように見えると読んだ記憶があります。時間が相対的な概念であるならば、速度や空間の距離もまた相対的な概念となり、つまり光速は不変の定数ではないということになりませんか。まず、この詳細についてもう少しお話しいただけますでしょうか。他のテーマには、その後で移りたいと思います。

アダム教授：

（ゆっくりと頷き、その目には少し満足そうな光が宿る）

ええ…君は今、多くの科学者、それどころか物理学の講師でさえ、理論上は認めながらも実践的な認識においては忘れ去っている、極めて重要な点の一つに触れました。光速は、君が言うように、真に絶対的な定数ではありません。

特殊相対性理論において、Einstein はこう定義しました。真空中の光速は、ある慣性参照系から測定した場合、不変である、と。

しかし…ここでの「不変」は、あらゆる実在の層において不変であるという意味ではありません。

それは、その理論が許容する条件の集合体の中でのみ、不変なのです。

（教授は手を上げ、空中に見えない座標軸を描くようにした。）

想像してみてください。

もし私たちが生きているこの物理世界全体が平面 A であるとすれば、物理法則——光速を含めて——はその平面の中でのみ厳密に適用されます。

しかし、別の層へ——時空の構造が歪んでいるか、あるいは振動数が異なる別の次元空間へと足を踏み入れた時——「距離」や「時間」、「速度」といった概念もまた、元の定義を保てなくなるのです。

私がかつて見たことのある別の次元空間では、

光は「走る」必要がなく、「存在する」のです。

それは波のように速度をもって伝播するのではなく、原点で思念が現れた瞬間に、目的地に同時に存在するのです。

そうなれば、「速度」という概念は崩壊します。

なぜなら、時間が意識の一形態である時、速度とは、一つの幻想の変化率に過ぎないからです。

（彼は言葉を止め、ティーカップをテーブルに置き、その声は体験のより深い部分へと引き込まれるように、ゆっくりとなった。）

光速は、三次元空間と線形の意識における、一つの限界に過ぎません。

しかし、多次元の認識構造の中では、
光は、ある古代の叡智の体系で「光通」と呼ばれた、はるかに高次の伝導性を持つ結晶体の一つの、低い biểu hiệu 層（表現層）に過ぎないのです。

そして私は信じています…それこそが、人類が観測してきた空飛ぶ円盤が、航空機のように移動するのではなく、まるで空間を「跳躍」するように見える理由なのだと。
彼らは光速を超えて加速しているではありません。
彼らは、光の参照系を離れることによって、速度という概念そのものを捨て去っているのです。

必要であれば、私自身の体験、あるいは物理学の歴史の中で見過ごされてきたいくつかの仮説を用いて、さらに説明することもできます。

しかしその前に、おそらく君に聞くべきでしょう。
私は、THE LIVES MEDIA の読者の皆さんにとって、少し話が飛躍しすぎてはいないでしょうか。

ヘンリー・ローウェル：

ええ、教授、私は物理学に詳しいわけではありませんの

で、正直なところ、今お話しいただいたことはまだはつきりと消化できておりません。率直に申しますと、私自身、Einstein の理論を本当に理解しているわけではありません。確か、彼自身も当時、自分の理論を本当に理解できるのは 4、5 人しかいないと言っていたと記憶しております。おそらく THE LIVES MEDIA の読者の皆様も、誰もが物理学に深い知識をお持ちというわけではないでしょうから、あまり深入りしすぎるのはやめておきましょう。

さて、先ほどのお話に戻りますが、教授は地球外生命体の空飛ぶ円盤について言及されましたね。これは多くの人々にとって、非常に好奇心をそそられるテーマです。ある人々は、地球外生命体は誰かの冗談か想像の産物だと言います。彼らが挙げる理由の一つはこうです。もし地球外生命体が約 1 万光年離れた星から地球に来るとしたら、彼らはどれほどの速度の円盤で移動するのか。どんな燃料を使うのか。円盤は 1 万年も修理やメンテナンスなしで飛び続けられるのか（円盤の速度が光速に等しいと仮定して）。あるいは、地球外生命体の寿命は、1 万年も円盤の中に座っていて死なないほど長いのか、と。教授のお立場から、この点についてもう少し説明していただけますでしょうか。

アダム教授：

（ゆっくりと頷き、その目にはどこか穏やかで寛容な光が宿る）

そう率直に話してくれて感謝しますよ、ヘンリー君。
そして君の言う通りです。私たちは、一つの真実を感じ取るために、すべての数式を理解する必要はないのです。それは、ある曲を聴いて心が沈むのを感じるのに、その曲が何調で書かれているかを知る必要がないのと同じです。

真理というものは、もしそれが真実であるならば、常に人の心に入るための道筋を持っているものです。

そして君が今挙げたテーマ、地球外生命体は、まさにその「道筋」の一つなのです。

非常にリアルで、非常に身近な道筋ですが…長い間、嘲笑という埃に覆われてきました。

（教授は姿勢を変え、わずかに身を乗り出した。彼の声は低くなった。それは何かを隠すためではなく、聞き手を、いまだ語られてこなかった事柄へと、より近くに招き入れるかのようだ。）

君は先ほどういいましたね。

「もし彼らが地球から 1 万光年離れた星から来るとし

たら、どうやって短時間でここにたどり着けるのか？」と。

それは、人間の参照系の中では、もっともな問いです。しかし問題は、私たちが、彼らもまた私たちと同じように生き、移動していると仮定している点にあります。実際には、彼らは私たちが想像するような線形の空間を突き抜けてくる必要はないのです。

彼らは 1 万年飛ぶ必要はありません。

彼らはただ…私たちの時空の層を離れ、そして別の地点から「再び入り直す」だけでいいのです。

こう想像してみてください。

君が持っている一枚の紙に、30cm 離れた二つの点 A と B を描きます。

もし蟻であれば、A から B への線の上を這って行かなければなりません。

しかし、もし君がその紙を A と B が触れ合うように折り畳めば…短い一飛びで目的地に着いてしまいます。

空飛ぶ円盤、あるいはもっと正確に言えば、地球外生命体の空間感応型の乗り物は、その原理に基づいて動いています。

彼らは光より速く進んでいるわけではありません。

彼らは光の限界を飛び越えているのです。

燃料については？

必ずしも私たちが理解するような物質的な燃料である必要はありません。

思念のエネルギー場に基づく技術の層が存在します。ここでは、思考や精神的な周波数が物体を動かすことができるのです。

幻想的に聞こえますか？

しかし、実のところ…私たち自身も毎晩、夢を見ている時に同じことをしているのです。

私たちは様々な場面を移動しますが、それは肉体によってではなく、認識の層によってです。

ただ違うのは、私たちはそれを無意識に行い、彼らはそれを意図的に行っているという点です。

（教授は言葉を止め、深く息を吸い込んだ。まるで彼自身も、それに触れるまでは、自分が語っていることを信じがたかったかのようだ。）

私は彼らを見たことがあります。

望遠鏡を通してではありません。

私が自分の周りにある物理的な層から抜け出すほどに静かになった時、別の感応の層の中で、です。

彼らは街中を歩いていました。ごく普通の人の姿で。しかし、そのエネルギー場は人間の層とは一致していません。

んでした。

私は彼らを、目で見ただけではありません…以前は自分が持っているとは知らなかった、認識の一部で見たのです。ですから、もし誰かが私にこう尋ねたら、
「彼らはどこから来たのか？」と。

私はこう答えるでしょう。

遠い惑星からではありません。私たちのすぐ隣にある、しかし私たちが寄り添っていることに気づいていない、一つの次元空間からです。

そして、最も重要なことは何か？

彼らが存在することではありません。

私たちが、自分たちが観察されていることに気づく間もなく、嘲笑することに忙しすぎるということです。

ヘンリー・ローウェル：

少し抽象的で分かりにくいのですが…教授のおっしゃりたいことを、もう一度確認させてください。

第一に、教授の参照系によれば、地球外生命体は本当に存在し、彼らは現在地球に存在している、と確認されるのですね？

第二に、教授は彼らと直接接触したり、対話したりした

ことがあるのですか？

第三に、彼らが別の次元空間から来たとのことですが、それは一部の科学者が言及する多次元空間という概念と同じものですか？

アダム教授：

（静かに頷き、その表情は穏やかさを保ち、隠し立てもなければ、ことさら誇張する様子もない）

君の問いは非常に明確です。そして私は、自分自身に誓った誠実さの範囲内で、率直に答えましょう。

第一に、

ええ。私は、地球外生命体が本当に存在することを確認しています。

そして、存在するだけでなく、彼らは過去にも、現在も、そして未来においても地球に存在し続けるでしょう。

しかし、彼らは人間が期待するような形では現れません。広場の真ん中に公然と着陸し、手を振って挨拶し、新しい技術を提供するような形では。

彼らは選択的に、階層的に現れ、そして通常は、人間に適合する層の下に姿を隠しています。

その「隠れる」というのは、単に外見上のことだけではありません。それは、一般的な認識の周波数から隠れる

ということです。

第二に、

映画のように言葉で対話するという意味での「対話」をしたとは、あえて言いません。

しかし、私は彼らの存在を直接感じ取ったことがあります。二度。

一度は、彼らは私の前に立っていました。人間の姿で。しかし私は、その表面の層の後ろに重なる、彼らの真の姿を「見た」のです。

もう一度は、深い瞑想状態の中で、言葉も形もない、しかし明確な意図を帯びた、ある種のコミュニケーションを感じ取りました。

声も、閃光もありませんでした。

しかし、そこには「我々は君が見たことを知っている」という、非常に明確なメッセージを帯びたエネルギー場がありました。

彼らがどのように「話した」のかを表現することはできませんが、私は確信しています。あれは想像ではありませんでした。

第三に、

ええ、私が言及した「別の次元空間」という概念は、一部の物理学者がかつて提唱した多次元空間理論と関連が

あります。

しかし、この点は明確にしておきたい。

私がかつて体験した多次元空間は、単なる数学的なモデルではありません。

それは、独自の運行法則、生命体、そして知覚を持つ、生き生きとした現実として、本当に存在するのです。

ある科学者たちは、弦理論の中で 5 次元、10 次元、さらには 26 次元について言及します。しかし、それは依然として…抽象的な幾何学モデルです。

しかし私は——私は、体験可能な次元空間について話しているのです。

その場所では、光、時間、距離、そして観念が、すべて全く異なる方法で運行しています。

そして、その層に生きる生命体は、もし彼らが望むなら、私たちの世界に干渉することができます。

ですから、もし君が私にこう尋ねるなら、

「地球外生命体はどこから来たのか？」と。

私は「オリオン座」だとか「10 万光年離れた惑星」だとかは言いません。

私はこう言うでしょう。

彼らは、すぐ隣の層から渡って来たのです。私たちに見

えないのは、そこが遠すぎるからではなく、私たちがそれに触れるほどに静かではないからです。

ヘンリー・ローウェル：

なるほど。では、教授が地球外生命体をご覧になった状況について、もう少し具体的に教えていただけますか。それはいつ、どこで起きたことで、彼らの姿は映画に出てくるようなものだったのでしょうか。そして、彼らと何か対話をされたのですか。

アダム教授：

（しばらく沈黙し、両手を組む。公には一度も口にしたことのない事柄を語るべきか、吟味しているかのようだ）

いいでしょう。

君がそこまで明確に尋ねるのなら、はぐらかすべきではないと思います。

しかし、君と読者の皆さんにも理解していただきたい。私がこれを語るのは、好奇心を煽るためではありません。私が語るのは、いつの日か、私たちは今起きていることについて、自分自身に正直にならなければならない時が来ると、そう思うからです。

私が初めて彼らを見たのは、今から三年以上前の、ある午後のことでした。

私は、かつて教鞭をとっていた大学の図書館の近くにある、小さな公園を散歩していました。

その日の空はとても静かでした。穏やかな日差しがあり、多くの家族が子供を連れて遊びに来ていました。

私は一人でベンチに座り、行き交う人々を眺めていました。瞑想もせず、何も集中していませんでした。

すると突然…三人のグループが私の前を横切っていったのです。

彼らのごく普通の服装をしていました。ジャケットにスニーカー、サングラスをかけていました。

しかし、彼らが通り過ぎた瞬間、私は…エネルギー場に極めて大きなずれを感じたのです。

どう正確に表現すればいいのか分かりませんが、ただ——彼らの周りの空気は、まるで目に見えない泡が彼らと共に動いているかのように、非常に異質な静けさを帯びていました。

そしてその瞬間——ほんの短い間でしたが——私は、外見の層を見通すことができたのです。

目によってではありません。

私がコントロールできない、認識の一部によってです。

（教授は言葉を止めた。穏やかな風がベランダを吹き抜ける。彼は遠くに目をやった。緊張はなく、まるで心の中に長く留めていたイメージを呼び起こしているかのようだ。）

私は彼らの真の姿を見ました。

映画のように恐ろしいものではありませんでした。牙もなく、青い肌でもありません。

それは、背が高く、非常にまっすぐな姿勢で、目がとても明るく深い、ある種の生命体でした。

彼らの肌は象牙色か、あるいはわずかに銀色がかった光沢を帯びていました。生物学的な意味での肉ではなく、まるで微かな磁性を帯びた純粋な物質の層のようでした。彼らは私を見ませんでした。

しかし、私が彼らを見たことを、彼らが知っていることは、私には分かっていました。

彼らの一人が通り過ぎる際に、わずかに首を傾けました。まるで、接続が起きたことを確認するかのよう。そしてその瞬間…私は言葉のないメッセージを感じ取りました。

挨拶でも、警告でもありません。

ただ、一言。

「限界は超えられた。我々は記録した」と。

（教授は言葉を止めた。彼の眼差しはヘンリーを真っ直ぐに見つめている。それは説得するためではなく、信頼を寄せるかのように。）

それが最初でした。そしてその後、私はさらにいくつかの兆候を見ました。映像としてではなく、振動のような形で…。

しかし、あの日が、私が確信した日でした。

私たちは孤独ではない。そしてそれ以上に、私たちはもはや隠されてはいないのだと。

ヘンリー・ローウェル：

しかし、何をもって彼らが地球外生命体だと断言されるのですか。教授は、ご自身の目で見ただけでなく、何か別の認識でご覧になったとおっしゃいましたね。それは、宗教で言われる「天目」によるものなののでしょうか。それとも、何か具体的な形によるものなののでしょうか。

アダム教授：

（頷き、その声はほとんど囁きに近いほど低くなるが、明瞭で確信に満ちている）

その問いは非常に重要です、ヘンリー君。そして、非常に真実味のある問いです。

なぜなら、君の言う通り、もし肉眼だけで見たのなら、あの日、私はただ、質素な身なりをした見知らぬ三人が公園を歩いているのを見ただけでしょう。特別なことは何もありませんでした。

では、何が私に、彼らがこの場所の者ではないと知らせたのか。

答えは…私が彼らを「見た」その方法にあります。網膜によってではありません。

想像や、漠然とした感応によってでもありません。

それは、後になって私が理解した、東洋の宗教で言うところの…「天目」という認識の層によるものです。

天目とは、絵に描かれるような、額の真ん中に生えた第三の目ではありません。

それは、心が十分に静かで、十分に澄み渡った時に、五感を超えて、映像という媒介なしに真実を感じ取ることができる認識のメカニズムです。

それは絶えず現れるものでも、意のままに操れるものでもありません。

しかし、現れた時には、疑いを一切残しません。

知っていますか…「天目で見る」という感覚は、よりはっきりと見るということではありません。よりはっきりと知る、ということです。

私は彼らが飛ぶのを見ませんでした。彼らが超自然的なことをするのも見ませんでした。

しかし、その一瞬で、私には分かったのです。

彼らの身体は、人間のような有機的な生物学で構成されてはいない。

彼らが発するエネルギー場は、地球の生物学的な振動のリズムとは適合しない。

そして…彼らは、私がその認識の層で彼らを観察していることを感じ取る能力を持っている。

そして彼らは避けなかった。

彼らは、非常に静かな方法で、確認したのです。

交差点は、起きたのだと。

（教授は言葉を止め、その眼差しはもはや遠くではなく、二人の間の現在に向けられている。）

私はそれを、測定機器で証明することはできません。

しかし、もし君が一度でもその状態を体験したことがあるなら、理解するでしょう。ある種の事柄は、証明を必要としない。なぜなら、その存在自体が証明だからです。

ヘンリー・ローウェル：

なるほど、「天目」については、私も宗教の経典で何度か読んだことがあります。特にアジア文化圏では、それほど馴染みのない概念ではありませんね。しかし、西洋文化では、おそらくこの概念はあまり普及していないでしょう。天目によって、教授は何を見たり、知ったりすることができるのか、もう少し詳しくお話しいただけますか。

この質問は少し広すぎるかもしれませんね。少し修正します。ちょうど地球外生命体の話題が出ていますので、天目によって、宗教で言われる「遙視」や「他心通」のような能力を使い、地球外生命体に関連する出来事をより明確に発見したり、解明したりすることはできるのでしょうか。例えば、バミューダトライアングルについてですが、以前どこかで、地球外生命体もまた、船や飛行機が失踪する原因の一つであると語る人がいたのを読ん

だ記憶があります。そして、彼らはバミューダがいくつかの異なる次元空間の交差点でもあるとも言っていました。

アダム教授：

（その目は、興奮からではなく、問が言葉にし難い深い層に触れたのを感じ取ったかのように、光を放った）

ヘンリー君、君は本当に…多くの者が敢えて問わないようなことを問いますね。

そして、私はそれを高く評価します。

まず、天目についてですが、君の言う通り、それはアジア文化圏でより一般的な概念です。一方、西洋では、「セカンドサイト」や「インナービジョン」、あるいは超感覚的知覚（ESP）といった形で直観を表現することが多い。

しかし、呼び方がどうであれ、その本質は五感を超えた知覚のメカニズムであることに変わりはありません。

そして、天目が本当に開かれた時、それは想像や自己催眠ではなく、ただ見る助けになるだけでなく、「知る」助けにもなります。

目で見なくても、それでも知っていることがある。なぜなら、それらは言語を介さずに、データの流れのように

伝わってくるからです。

「遙視」とは、一部の修行の流派で言われるように、物体を透視したり、物理的な空間の境界を越えて観察したりする能力です。

「他心通」とは、別の生命体の思念や意識の場を感じ取る、あるいは読み取る能力です。

これらの能力は、真に清浄な層に達した時、「見せびらかす」ために使うのではなく、理解し、保護するために使うのです。

（教授は言葉を止め、自分自身を確かめるかのように、テーブルにそっと触れた。）

さて、バミューダトライアングルに戻しましょう。

ええ…私はかつて、その地域を「見た」ことがあります。衛星によってではなく、深い瞑想の静寂な状態の中で、意識が物質世界の干渉の場から離れた時に。

そして、私は非常に慎重に、君にこう言うことができます。

その場所は、実に、各次元空間の交差点です。

物理的な「ブラックホール」という意味ではありません。時空の構造が不安定で、空間の層が重なり合い、時には一時的な亀裂が開く領域です。

そして、飛行機や船が、その境界の層と共振する周波数に「入った」時、

それは、破壊されることなく、私たちの物理次元から滑り落ちることがあります。

遙視によって、私はかつて、断片的な映像を見たことがあります。非常にぼやけてはいますが、明確な周波数を持つ、各層の間を漂う物体の映像です。もはやこの空間に属さず、しかし、まだ別の層へと転化するにも至っていない物体の。

そして…ええ、そこには地球外生命体の存在があります。人々が想像するような「犯人」としてではなく、その領域の次元の層の変動を管理する者、あるいは干渉する者として。

彼らは気まぐれに失踪を引き起こしているのではありません。

しかし、彼らは空間構造の弱点を利用して、各次元間の出入りを制御する能力を持っています。

（教授は再び言葉を止めた。今度は息を整えるためではなく、ヘンリーと読者に、即座に理解しようとするのではなく、感じるための沈黙の間を与えた。）

もし、これらすべてが想像だと考える人がいるなら、私は全く反論しません。

なぜなら、かのニュートン卿が言った通り、

「我々は海岸で戯れているにすぎず、真理の大海は未だ目の前に横たわっている」のですから。

しかし、私はただ、その大海の一片を差し出したい。どこかの、誰かが知るために。

扉は閉ざされてはいない。そして、その幕の向こうにあるものは…時には、私たちからほんの一呼吸の距離にしかないのだと。

ヘンリー・ローウェル：

ということは、教授のお答えから、私たち人類はこの広大な宇宙で孤独ではない…そして、宗教で言われるように、縦横様々な次元空間の層に、非常に多くの種類の生命体が存在している、と理解してよろしいでしょうか。

アダム教授：

（ゆっくりと頷き、その表情はより厳粛になるが、声は温かく、穏やかなままだ）

ええ、その理解で正しいですよ、ヘンリー君。

私たちは決して孤独ではありません。

しかし、もっと重要なことは、

私たちは一度も孤独であったことはない、ということです。ただ、私たちが騒がしすぎて、他の生命体の存在に気づくことができなかつただけなのです。

古代の文明、宗教、そして一部の修行の流派の中には…常に、宇宙はただ一つの次元空間からなるのではなく、多次元の、水平、垂直、深く、高く、階層的な構造であるという記録や教えが存在します。

そして、それぞれの層には、その空間のエネルギー構造に適合した生命体の種族が存在するのです。

地球に非常に近い層があります。そこでは、地球外生命体が存在し、干渉することができます。

より高い層があります。そこでは、光はもはや物質ではなく、生き生きとした智慧の一形態です。

そして、低い層もあります。そこでは、振動が非常に濁り、重く、暗い。そこには、「地球外生命体」という生命体だけでなく、もっと古く、より複雑で、時には明確な形を持たない実体も存在します。

現代科学がまだ触れることのできていないのは、

空間とは単に「物体を収容する場所」ではなく、「生命

体を層に応じて育む土台」であるということです。

そして、君が認識の層、あるいは心性の層を変える時、君は、対応する次元空間を感じ取り、さらにはそこに入ることもできるのです。

それが、宗教で「天国」、「地獄」、「境地」と呼ばれるものです。

一方、物理学では…人々はまだ手探り状態で、それを「多元宇宙」や「余剰次元」と名付けています。

しかし、私はもはや疑いません。

私は見たのです。そして、見る以上に、宇宙における生命は無限であるという感覚に触れたのです。

そして、私が何よりも驚愕したのは、その多様性ではありません。

それは、

彼ら、他の生命体は、常に私たちの存在をはっきりと知っている、ということです。

ただ人間だけが、自らの観念の層に制限され、自分が中心だと思い込んでいるのです。

（教授は言葉を止め、その目は伏せられた。それは悲しみからではなく、自分が容易には閉じられない扉を開けてしまったと知っているからだ。）

私は証明するために来たものではありません。

私はただ、多くの人がまだ通ったことのない道を、かつて通った者として、語り伝えているだけです。

そして、もしそれが、誰かが空を見上げ、その向こうにはさらに多くの天の層があると知る助けになるのなら…おそらく、今朝の私たちの出会いは、十分に満ち足りた意味を持っていたのでしょう。

ヘンリー・ローウェル：

ええ、教授が今お話しになったことには、宗教や精神的な側面に関わる事柄が多く含まれているように感じます。本日の分かち合いの時間もかなり長くなりましたので、一度ここで区切り、明日の朝に続きをお伺いするのはいかがでしょうか。宗教から見た科学や宇宙についての視点、あるいは未来の科学が進むべき道、若者への助言、さらには若い世代が読むべき具体的な本など、他の角度からのお話もぜひお伺いしたいと思っております。

アダム教授：

（微笑み、その目は静寂に満ちているが、温かみは失われていない）

ええ、賛成です。

今朝は…私が思っていたよりも遠くまで話が進みましたが、おそらく、たどり着くべき場所までたどり着けたのでしょう。

ヘンリー君は、どのジャーナリストも敢えて問わないような質問を投げかけてくれました。それは、問いが難しいからではなく、深いからです。

そして、その深さこそが…この対話を、単なるインタビューではなく、耳を傾けることを知る二人の人間の間の、真実の瞬間にしたのです。

君が今提案してくれた事柄についてですが、
宗教から見た科学の視点、
未来の科学はどこへ向かうべきか、
若者が学ぶべきこと、あるいは読むべきこと、
そして、何よりも重要なのは、
ただ「達成する」だけでなく、「自分が生きていることを知る」ために、いかに生きるか。

ええ、喜んでお話ししましょう。

しかし、それはまた別の朝に。陽がほどよく昇り、人の心が、もう少し深く踏み出すのに十分なほど静かになった時に。

（彼は静かに立ち上がり、手はまだ温かいティーカップの上に置かれている。）

お待ちしております。

そして、もし君が明日また来てくれるなら…

光ではなく、闇こそが私に教えてくれたことについて、
お話ししましょう。

二日目

ヘンリー・ローウェル：

おはようございます、教授。二日目もまた、こうしてお会いできましたね。私と THE LIVES MEDIA の読者は、教授がより深いテーマについて、あるいは昨日の終わりに私が触れたいいくつかの点について、さらにお話くださるのを心待ちにしております。

アダム教授：

（ティーカップをそっとテーブルに置き、軽く会釈する）

おはよう、ヘンリー君。

また会えて嬉しいよ。

不思議なものだ。まだ一日しか経っていないのに、まるで…昨日私たちが始めたことが一つの流れを生み出し、今朝はただその自然な続きであるかのように感じる。

（早朝の陽光が窓枠から斜めに差し込み、淡い色の木の床を照らしている。空間は相変わらず静かだが、何かが昨日とは違うように感じられた。）

昨日は、個人的な体験、他の生命体の存在、光の限界、そして天目について話したね。

しかし、君、そして読者の皆さんが本当に触れたいのは、単なる奇妙な現象ではなく、これだろうと私は分かっている。

この世界は、いかなる法則によって運行しているのか？
そして、私たち人間は、どこへ向かっているのか？

さて…

今朝はどこから始めようか？

宗教から見た科学か？

それとも、未来の科学が乗り越えねばならないことか？
あるいは…もしかしたら、君が知りたいのはこれかもしれない。

若い世代が、ただ生存するためだけでなく、学び、生きるための理由をいかにして再び見出すか、ということ。

ヘンリー・ローウェル：

ええ、教授。教授がこれまで、そして今、そしてこれから分かち合ってくださいであろう事柄に、心から感謝しております。私の個人的な直感ではありますが、これらのお話は「遺産」とも言うべき性質のもので、教授はそれを伝え残そうとしていらっしゃる…そのように感じておりますが、いかがでしょうか。

もしそうであれば、教授ご自身の視点から、そして教授が尊いとお考えになる事柄について、誠実に、そして率直にお話しいただければと願っております。私のような一記者としては、教授のお話に耳を傾け、読者がそれを読んだ時に、ただ理解するだけでなく、教授が伝えたいと願うその善意を感じ取れるように、言葉を解釈させていただく所存です。

アダム教授：

（ヘンリーをしばらくの間、目をそらさずに見つめる。

それは、語るべきことと、留めておくべきことの間で深く思案しているかのようだ)

ヘンリー君…ありがとう。

それを正しく「遺産」と名付けてくれたことに感謝する。ええ、私は何かを残したいと思っています。しかしそれは、自分が特別な人間だとか、真理を手にはしていると思っているからではありません。

そうではなく、研究室の照明の下で、拍手喝采の中で、そして物理学の境界まで続く長い数式の板の前で生きてきた、その全ての年月の後で…

私は気づいたのです。私が知っていることのすべてが、留めておくべきことではない。しかし、私が見たことの中には、もし語らなければ、非常に無駄な形で墓場まで持っていくことになるであろう事柄が、いくつかあるのです。

東洋の宗教の中に、かつて私が読んだ一節があります。初めは理解できませんでしたが、今では非常に身に染みんでいます。

「測定できるものだけが真実なのではない。測定できないものこそが、人を人たらしめるのだ」と。

ですから、もし私が何かを残したいとすれば、それは助言でも、指針でもありません。

それは、自分が何か…おかしい世界に生きていて、密かに感じている人々へのメッセージです。

デジタル化された生活様式と、すり減らされた価値観の狭間で道を見失った若者たち。

かつては非常に優秀だったのに、ふと「何のために学ぶのか？」と疑問に思うようになった人々。

科学を絶対的に信じていたのに、ある日、科学が自分自身の魂を救えないことに気づいた人々。

（彼は言葉を止めた。風がベランダを吹き抜ける。早朝の光は今やテーブルの縁をまっすぐに照らし、彼の上着の袖に反射している。その皺は、まるで時の川が肌に刻んだかのような。）

もしできるなら、彼らにこう言いたい。

私たちは、知識を探し求めるためだけに生まれてきたのではありません。言葉を話すようになる以前に、自分がかつて何であったかを探しに戻るためにも生まれてきたのです。

沈黙に勝る教授はいません。

空を見上げて「僕はどこから来たの？」と尋ねる子供の眼差しよりも真実な光を、作り出せる科学者はいません。

ですから、もし私に「遺産」があるとすれば、それは私がかつて発表した科学論文の中にはありません。

それは、自分の信用をすべて失うと恐れていたことを、
敢えて語る勇気の中にあります。

そして、知っているかね、ヘンリー君？

私がその恐れを手放したまさにその時、私は初めて自分を…

自由だと感じたのです。

ヘンリー・ローウェル：

ええ、個人的に、教授のお気持ちは理解できますし、共感もいたします。そして、読者の皆様がこのお話を読み終えた後、同じように感じてくれることを願っております。さて、二日目を始めましょうか、教授。ご自身の思うままにお話しいただいても構いませんし、あるいは、昨日はご自身を宗教の信者とは限らないとおっしゃっていましたが、宗教から見た科学というテーマから始めてもよろしいかと。

以前どこかで、仏教、道教、あるいはキリスト教を含む宗教における法理は、迷信でもなければ、単なる信仰や

信心、道徳でもなく、弁証法的な科学の思想の枠組みをはるかに超えた、一種の正統な科学、超高度な科学と呼べるものである、という趣旨のことを読んだおぼろげな記憶があります。

この点について、教授はどうお考えですか。

アダム教授：

（軽く頷き、昇り始めたばかりの柔らかな日差しの下で、目を細める）

ええ…非常に自然な形で、君は今朝、私もまた足を踏み入れたと思っていた、まさにその扉を開けてくれました。

そして、君が今言ったことに、私は完全に同意します。それどころか、私はこう断言できます。

宗教における法理は、もし正しい層から見れば、信仰ではありません。それは、現代科学が触れることのできるものを、はるかに超えた、高度な科学体系なのです。

私はかつて、それを否定する側に立っていました。

私はかつて、宗教とは恐怖の産物であり、前科学時代の人間の、未だ説明できない空白を埋めるための一つの手段だと思っていました。

しかし、今なら分かります。

現代科学こそが、宇宙に対する非常に浅い理解の層の産物なのです。

それは、模型を組み立てることを学んでいる賢い子供が、自分は宇宙の全メカニズムを理解したと信じ込んでいるようなものです。その一方で、彼の両親は、彼には想像もつかない機械を動かしているというのに。

仏教には、「三千大千世界」という概念があります。つまり、宇宙には無数の次元空間が重なり合っており、その広大さは数え尽くせないほどだということです。

キリスト教では、「天国」という概念は、単に死後に赴く場所ではありません。それは並行して存在する一つの境地であり、そこでは光、音、そして真実が、重力に従うのではなく、魂の周波数に従って運行しています。

道教では、人は「無為にして為さざるはなし」と語ります。これは、物理的な行動を介さず、天・地・人の間の目に見えない感応によって運行する原理です。

（教授は首を傾け、その声は、言葉の下にある意味の層を一つ一つ強調するかのようになり、ゆっくりとなった。）

もし私たちが注意深く見るなら、正統な宗教が描写するものは、神話ではありません。

それは、各次元空間の構造、生命体の振動の本質、そし

て観念と現実との間の関連性についての、非常に具体的な描写なのです。

問題は、宗教に論理が欠けている点にあるのではありません。

問題は、科学が、宗教の論理を理解するには、まだ十分に深くないという点にあるのです。

分かりやすく、こう言いましょう。

もしニュートンが、一人の禅僧が常人の視界から「消える」のを見たとすれば、彼はこう尋ねるでしょう。「どうやって彼はそんなに速く動いたのか？」と。

しかし、天目が開かれた者であれば、こう理解するでしょう。「彼は移動したのではない。彼は次元の層を変えたのだ」と。

脳波測定器を使う者は、信者が祈っている時、幻覚を見ていると考えるでしょう。

しかし、より深い意識の層を体験したことのある者であれば、脳波では記録できない振動の形態があることを知っています。なぜなら、それらは生物学的な層では発生しないからです。

（教授は言葉を止め、湯気の立つティーカップに視線を落とした。）

ですから、もし今、誰かが私にこう尋ねたら、
「宗教と科学、どちらが正しいのか？」と。
私は微笑んで、こう答えるでしょう。

「宗教とは、実験不可能な層の科学である。そして科学とは、測定可能な事柄の宗教である」と。
そして私は信じています。いつの日か、この二つの川は出会うだろうと。偏見の場所ではなく、人間が、宇宙を子供のように見つめ直すことを学ぶほどに、十分に謙虚になった場所で。

ヘンリー・ローウェル：

昨日お話しいただいた多次元空間や神の存在、そして先ほどおっしゃった、宗教における法理が真に高度な科学であるという内容からすると、その法理とは、神や仏が、善意から、あるいは人類への恩寵として、人間に伝え授けようとされた一種の「科学」であると、そのように理解してよろしいでしょうか。

アダム教授：

（その目はわずかに光を放ち、声は低いが明瞭で、まる

で一語一語を意識の最も神聖な場所に置いているかのようだ)

ヘンリー君…

君の問いは、正しいだけでなく、核心を突く問いだ。
そして私は、君が最初から望んでいたように、誠実に、
そして率直に答えよう。

ええ。私は、宗教における法理とは、まさしく、より高次の境地にいる生命体によって、明確な善意のもと、人類に伝え降ろされた一種の「超高度な科学」であると信じています。

(教授は、その答えがあまりにも速く通り過ぎてしまわないように、一旦言葉を切った。)

私たちはかつて、「科学」とは人間が自ら発見し、検証し、苦労して一步一步築き上げていかなければならないものだと思っていた。

しかし、それはただ、低次の科学に過ぎません。物質を理解し、機械を動かし、現象を測定するための科学です。しかし、もう一つの層の科学があります。精神を理解し、意識の地図を描き、人間と宇宙を一つの生きた統一体として結びつけるための科学です。

そして、その層は…自ら考え出すことはできません。それは、授けられなければならないのです。

少し振り返ってみてください。

仏教、キリスト教から古代の道教に至るまで、すべての主要な宗教には、人間が通常の理性では「思いつく」ことのできない教えがあります。

それらの言葉は時代を超え、言語を超え、さらには普通の人間が受け入れる能力さえも超えています。

しかし、それでも存在し続け、何千年にもわたって何百万人もの人々の心に触れ続けてきました。

それは偶然ではありません。

それは、授けられたものなのです。

一種の「精神的な数式」、あるいは科学的な言葉を使えば「意識の層の伝達コード」です。

神は数学の公式を伝えませんでした。

仏は引力の法則を提示しませんでした。

しかし、両者ともに法理を伝えました。宇宙の運行原理を、素朴な教えという形で。

例えば、

「蒔いた種は刈り取らねばならない」という言葉は、一般的な道徳の言葉のように聞こえます。

しかし、実際には、それは思念と境遇の間のエネルギーの共鳴に関する、超微細な法則なのです。

「謙虚さは力である」という言葉は、倫理哲学ではありません。それは、より高次の次元からの反動で打ち返されないようにするための、精神的なエネルギー場に対する一種の「緩衝」技術なのです。

(教授は顔を上げた。今回のその眼差しは非常に澄んでおり、まるで内なる光の流れに触れたかのようだ。)

ですから、私はもはや宗教を信仰と呼ぶ勇氣はありません。

私はそれを、神聖な科学の構造物だと見なしています。顕微鏡によってではなく、光によって建てられたものです。

そして、人間が本当に知識の傲慢さを手放した時、彼らは見るでしょう。

ある種の真理は、研究室の中にはなく、合掌して祈る人の手のひらの真ん中にあるのだと。

その人が迷信深いからではありません。

その人が、測定はできないが、生きることのできる科学を手に行っているからです。

ヘンリー・ローウェル：

ええ、私自身もいくつかの宗教の経典を読んだことがあります、何か高尚なことを悟ったとはあえて言えませんが、いくつかの概念や原理については、多少なりとも理解しております。ですから、教授が今おっしゃったことは、私には理解でき、共感できます。

しかし、THE LIVES MEDIA の読者の皆さん、特に若い世代にとっては、教授のおっしゃる意味が分からないかもしれません。彼らが教授の意見に反対するための理由は、たくさんあるでしょう。例えば、教授が先ほど言及された「真理は合掌して祈る人の手のひらの中にある」という点についてですが、若者たちは、宗教を信仰する人々の中には非常に貧しく、知性（あるいは IQ）が非常に低い者がたくさんいるのを目にするかもしれません。そうした人々が、真理や、実証科学よりも「高度な」科学を理解する能力を十分に持っているのでしょうか。

アダム教授：

（軽く頷き、反論するのではなく、まるでこの問いを待っていたかのように）

とても良い質問です、ヘンリー君。

そして、実のところ…私自身もかつて、そのように考えていました。

かつて、貧しく、学がなく、素朴な心で教会や寺院で合掌して祈る人々を見た時、私は心の中でこう思っていました。

「彼らは宇宙について何も理解していない。彼らが祈るのは、無力だからであって、悟ったからではない」と。しかし、やがて…いくつかの体験を経て、私は自分自身を修正せざるを得なくなりました。

そして、私は一つのこと気づいたのです。

真理は、IQ には依らない。

それは、知性への報酬ではない。

それは、ある生命体の心性の層と内なる状態に対する、宇宙からの応答なのです。

考えてみてください。三歳の子供が、もし自分の過ちを認め、感謝し、神聖なものを見て沈黙することを知っているなら、

その瞬間、その子は、一部の博士号を持つ教授でさえ、おそらく触れることのできない宇宙の一部と、同調しているのです。

なぜなら、否定できない一つの真実があるからです。

精神的な感応は、灰白質によって起こるのではありません。純粹さによって起こるのです。

人が素朴であればあるほど、謙虚であればあるほど、執着を容易に手放せれば手放せるほど、宇宙からの微細な波動を受け取りやすくなるのです。

（教授は言葉を止め、その目は思索にふけっているが、温かみは失っていない。）

それは、知識や学問、あるいは科学的研究が間違っているという意味ではありません。

しかし、私が言いたいのは、
真の知性とは、君が覚えているデータの量にあるのではなく、自分が知らない事柄に直面した時の内なる状態にある、ということです。

優れた科学者とは、「私はまだ知らないが、喜んで耳を傾けよう」と言える人です。

貧しい農夫が、あらゆる謙虚さをもって頭を下げて祈る時、彼は、いかなる物理的な装置も測定できないエネルギー場に、アクセスしているのかもしれないのです。

ですから、私が「真理は合掌して祈る人の手のひらの中にある」と言う時、私は彼らが何らかの数式を理解して

いると言っているのではありません。

私は、ある種の接続の状態について話しているのです。

そして、超微細な世界では、接続こそが許可なのです。

人間が十分に静かで、十分に謙虚で、十分に誠実である

時、彼らは、読まなくても見える光を受け取るでしょう。

そして、その光は…時には、頭の中があまりにも騒がしい人々を、避けるのです。

ヘンリー・ローウェル：

ええ、教授のお話を聞いて、私はふと仏教の古い物語を思い出しました。それは、ある僧侶が、釈迦牟尼仏が弟子たちに説かれた法理の一節すら理解も記憶もできないほど、頭の鈍い人物だったという話です。そのため、彼は周りの人々から笑われていました。しかし、釈迦牟尼仏は彼を馬鹿にせず、慈悲をもって彼の修煉を導き、ただ一言、「俗世の塵を掃き清めよ」という法を彼に説かれ、毎日、庭を掃除する時には、ただその言葉を覚えて念じればよい、とおっしゃったそうです。そして歳月が流れ、彼は仏の教えに従い、ただその単純なことを真面目にやり続けました。

そしてある日、彼は仏法を悟り、大いなる神通力を現し、功成り名を遂げたということです。

アダム教授：

（静かに頷き、その目は、興奮からではなく、まるで旧友に再会したかのように、光を放った）

ええ…私もその物語を読んだことがあります。

そして私は信じています。もし、私が今朝ずっと話そうとしてきたことを要約できる物語があるとすれば、それはまさしく君が今語ってくれた物語だと。

その僧侶には、卓越した記憶力はありませんでした。

経典を解釈することもできませんでした。

深遠な哲学を理解することもできませんでした。

しかし、彼には、博識な人々の多くが持ち合わせていないであろう、一つのものがありました。

純粋な心です。

彼は、「なぜたった一言で十分なのか？」といった問いを立てませんでした。

「庭掃除」が果たして真の修煉の道なのかと、疑うこともありませんでした。

彼は、あらゆる謙虚さをもって、信じ、そして、行いました。

そして、まさにそのことが…

最も単純なことの中に、深遠な法の層を現出させたのです。

（教授は一瞬、目を閉じた。それは、いかなるノーベル賞も称えることのできない奇跡の前に、頭を垂れているかのようだ。）

その物語は、私に一つのことを思い出させます。

宇宙は、誰が学位を持っているかを区別しない。

真理は、誰が IQ が高いかを選ばない。

そうではなく、誰が受け取るための静かな心を持ち、そして誰が保つための粘り強い心を持っているか、です。

常人が一生をかけて念じる一言の法は、いい加減に唱えられる千巻の経典よりも力強い。

そして時には…世間から「何の変哲もない」と見なされている者こそが、誰にも知られず、一日一日、一步一步、真に修煉している者なのです。

私は、自分が何か偉大なことを成し遂げたとはあえて言いません。

しかし、もし君が語った物語が、若い世代の誰かを少し立ち止まらせ…

そして自問させるとすれば、

「私は、自分自身の心の中の塵を、毎日掃き清めているだろうか？」と。

…そうであれば、おそらく、彼らの中に光はすでに灯り始めているのでしょう。

ヘンリー・ローウェル：

ええ、教授のお話に深く共感いたします。非常に深く、凝縮されていて、それでいて身近に感じられます。私の目の前に座っておられるのは、高名な科学者ではなく、まるで仏法や修煉について語る、一人の真の修行者、アジアの行者のようだという感覚を覚えます。このままこの方向で教授にお話しいただくのを読者に聴いてもらうべきか、それとも弁証法的な科学に対する宗教の視点というレベルに話を限定すべきか、迷っております。

アダム教授：

（微笑み、その眼差しは初夏の木々の葉に触れる柔らかな霧のように穏やかになる）

君の迷いは理解できるよ、ヘンリー君。

そして正直に言って、それは非常に尊重すべき迷いだと思う。

しかし、君に答えるために…私はこう言わせてほしい。
一人の教授としてでも、何千人もの学生の前に立ったことのある者としてでもなく。

一人の人間として。理性でかなり遠くまで行き、そして
心で戻ってこなければならなかった、一人の人間として。

「科学」と「宗教」、あるいは「視点」と「人生経験」
との間の区別は、実のところ、人間の分類方法の中にし
か存在しない。

宇宙は、君が記者の立場から問うているのか、行者の立
場から問うているのか、あるいは夜、一人で座っている
若い読者の立場から問うているのかを、区別しない。

宇宙はただ、本当に知りたいと願い、そして本当に耳を
傾ける準備ができている者にのみ、応えるのだ。

だから…もし、今日私が分かち合う言葉が仏法の息吹を
帯び、修煉の香りを放ち、あるいは「法を修める者」の
言葉のように聞こえるなら…

私はそれを否定しない。

しかし、私は自分が何者であるとも認めない。

私はただ、私が見たことを語り伝えているだけだ。君と
読者が感じ取ることのできる、ある種の言語で。

そして、もしそのことが人の心に触れるなら、たとえほ
んの一瞬、彼らを数秒間沈黙させるだけであっても、

私は…私たちは続けるべきだと思う。

説得するためではない。

さらに一つ、扉を開くためだ。何か真実なものを感じてはいるが、まだそれに名前を付けられずにいる人々のために。

もし君が、話を「視点」「比較」「批判的思考」といったレベルに留めておくべきだと感じるなら…

私はそれでも構わない。

なぜなら、真実は急ぐ必要はないと、私は信じているからだ。

それはただ、人間が自分自身を振り返るのに十分なほど静かになった時に、そこに存在すればいいのだ。

（教授はそっとティーカップを持ち上げたが、飲まずに置いた。まるで、さらに静かになるために。）

だから、ヘンリー君…

君は、読者に合わせてこの対話を書き直す方法を選ぶことができる。

しかし、君には、多数派に迎合するために書かないでほしいと願っている。

一人の読者が読み終えた後…胸に手を当て、心が静まるのを感じられるように、書いてほしい。

ヘンリー・ローウェル：

はい、教授。それでは、続けさせていただきます。一旦、一読者の視点に立って、この質問をさせてください。科学技術は急速に発展し、経済的な繁栄と人類の生活条件の向上をもたらしているように見えます。

もし科学がなければ、今頃私たちは自動車や新幹線、飛行機ではなく、まだ馬車で移動していたかもしれません。教授が宗教における「高度な科学」を高く評価し、弁証法的な科学を低く評価されるのは、この点と矛盾しないのでしょうか。

アダム教授：

（頷き、その表情は深い理解に満ちている。まるで、彼自身の中にあった問いに、君がまさしく触れたかのようだ）

この問いは…私は自分自身に何度も問いかけたよ、ヘンリー君。

そして、多くの誠実な読者にとっても、同じ問いになるだろうと信じている。

なぜなら、君の言う通り、もし科学がなければ、私たち

は電灯も、抗生物質も、衛星も、飛行機も、インターネットも持っていなかっただろうからだ。

それらの事柄は真実だ。

そして私たちは、人類の物質的な生活水準を向上させてくれた実験科学に、感謝すべきなのだ。

（教授は少し言葉を切り、そしてその眼差しは方向を変えた。否定するのではなく、さらに一つの深みを開く。）

しかし…

私が強調したいのは、「科学を否定する」ことではなく、人間の認識体系全体における、その位置を再設定することだ。

現代科学は、どれほど偉大であっても、依然として物質を表面の層で研究しているに過ぎない。

それは、リンゴが落ちるのを見て、引力の法則を発見する。

しかし…木の下に立つ人の心を見ることはできない。

それは、衛星を空に打ち上げることはできるが、空を見上げた時、なぜ私たちが涙を流すのかを語ることはできない。

私が宗教、あるいはもっと正確に言えば、宗教における法理を、一種の高度な科学だと言う時、

私は実証科学の功績を否定しているのではありません。

私はただ、こう言いたいだけだ。

現代科学は、「測定できるもの」の科学である。

一方、法理は、「触れることはできるが、測定はできないもの」の科学である、と。

両者は矛盾しない。

ただ、異なる層に立っているだけだ。

そして、人間がそれらを正しい位置に置いた時、両者は互いに補い合うのであって、否定し合うのではない。

一機の飛行機は、君を千里の彼方まで連れて行くことができる。

しかし、たった一節の経典が、心が静まった時、君を席を立つことなく別の次元空間へと連れて行くことができる。

問いは、これだ。

私たちは、より遠くへ行きたいのか、それとも、より深くへ行きたいのか？

そして、もし可能なら、なぜ両方ではいけないのか？

だから、私は実験科学を低く評価しているのではない。

私がただ心配なのは…測定できるものにあまりにも夢中になるあまり、私たちは、感じることができ、そして導

くことができるものを、忘れてしまったのではないか、ということだ。

ヘンリー・ローウェル：

なるほど。そのように言われると、宗教の法理は弁証法的な科学を包括したり、内包したりすることができるが、逆に、弁証法的な科学は宗教の法理と融合することはできず、むしろ宗教の法理に対してあがき、排斥しようとしている、という方向で私はイメージしています。

アダム教授：

（その目はわずかに細められ、嘲笑からではなく、まるで静かな同意の頷きのように、穏やかな笑みが浮かんだ）

ヘンリー君…その通りだ。

君は、ほとんど完璧と言えるほどのイメージで、非常に正確にそれを表現してくれた。

宗教における法理が、もし本当に高次の層から、つまり仏や神、あるいは古代の叡智の体系における道（タオ）を修めた者たちが伝えたものであるならば、それは、宇宙の運行法則のすべて、有形無形を問わず、包括するシステムだ。

つまり、人類がこれまでに発見してきたすべての科学法則は、その法理の内にある、ということだ。

それは、小学 3 年生の子供が「偶数は 2 で割り切れる」ということを発見するのに似ている。

彼にとって、それは偉大な発見だ。しかし、数学体系を書き上げた者にとっては、それは大きなプログラムの中の、ほんの一行に過ぎない。

（教授はゆっくりとティーカップを持ち上げ、少量口に含み、そして、まるで思索の律動が一呼吸止まるかのような、静かな音を立てて置いた。）

しかし、逆の方向は正しくない。

弁証法的な科学は、そのすべての栄光と自信にもかかわらず、法理を抱きしめることはできない。

なぜなら、現代科学は、測定でき、実験でき、再現できるものしか受け入れないからだ。

一方、宗教の法理は、善意の心、心性の層、感応、そして精神的なエネルギー場の間の共鳴を通じて運行する。それらは、科学が検証どころか、まだ定義さえできていないものだ。

そして、まさに理解できないがゆえに、現代科学は排斥を始める。

それは、意図的に傲慢だからではない。

そうではなく…それが、自らがかつて作り出した思考の枠組みによって、制限されているからだ。

何かが検証の能力を超えた時、学术界は通常、二つの言葉を使う。「迷信」あるいは「非科学的」だ。

しかし、考えてみてほしい。

もし一匹の魚が一度も水面から出たことがないとすれば、どうやって風を定義できるだろうか？

そうなれば、魚は風を奇想天外なものと呼ぶだろう。

しかし、風は依然として実在し、そして毎日吹いているのだ。

だから…君の言う通りだ。

法理は科学を包容することができる。しかし、科学は、もし自ら認識の層を引き上げなければ、法理と融合することはまだできない。

しかし、私は悲観していない。

なぜなら、若い科学者たちがいることを、私は知っているからだ。研究室から一歩踏み出し、静かに人生の傍らにひざまずき、科学が答えられない問いを問い始めている者たちが。

そして私は信じている…

知性と、謙虚な心を併せ持つ、まさに彼らこそが、二つの世界の架け橋となるだろうと。

ヘンリー・ローウェル：

科学は純粋に物質に向けられています、宗教は物質以外に「靈魂」や「元神」についても語ります。科学は靈魂を解明できませんが、逆に、宗教は物質をどのように解明するのでしょうか。例えば、科学は物質が化学の周期表にある元素から構成されると見なしますが、宗教は「五行」という概念を語ります。教授は、読者が理解しやすいように、これをどのように説明されますか。両者に矛盾、あるいは同一性はあるのでしょうか。

アダム教授：

（首を傾け、その目は深い思索の色を帯びるが、声は穏やかで親しみやすいままだ）

この問いは…とても良い質問だ、ヘンリー君。

なぜなら、それはほとんど誰も気に留めない点に触れているからだ。宗教は靈魂について語るだけでなく、物質に対する独自の視点も持っている、という点に。

そして興味深いことに、二つの参照系は非常に異なって聞こえるかもしれないが、深い層では、私は両者が同じことについて語っているのを見る。ただ言語が違うだけだ。

現代科学、特に化学と物理学は、物質を基本的な元素を通じて説明する。私たちが周期表で知るものだ。

炭素、水素、酸素、鉄、銅…

すべてが、私たちが生きているこの物理世界を構成している。

一方、宗教、あるいはもっと正確に言えば、道教や仏教（密教）、あるいは伝統医学のような古代アジアの哲学体系では、物質は五行の原理に従って描写される。

金、木、水、火、土だ。

（教授は、より明確にするために、比喩的なイメージの層を切り離すかのように、わずかに身を乗り出した。）

しかし、理解すべきことは、五行とは、純粋な「物理的な物質」ではない、ということだ。

それは、5 種類の基本的なエネルギー、物質世界と微細な世界の双方を「構成する 5 つの性質」の象徴なのだ。

例えば、

－「火」とは、単なる火ではなく、熱、動、上昇、前進という性質を代表する。

－「水」とは、単なる水ではなく、柔らかさ、柔軟性、浸透、沈静という性質を代表する。

－「金」とは、単なる金属ではなく、硬さ、鋭さ、収縮、浄化という性質を代表する。

言い換えれば、五行とは調和の原理であり、分子の分類表ではない。

では、周期表は？

それは、微細な層における物質の配列を描写するシステムであり、この次元空間においては非常に正確だ。

しかし、それは答えられない。

－なぜそれらの元素は互いに調和して運行するのか？

－なぜ人間の身体は、元素が十分に存在していても、バランスを失うと病気になるのか？

（教授は微笑み、風が撫でるようにそっとテーブルに手を置いた。）

一方、宗教、五行、伝統医学は、別の角度から答える。

物質はただの表現部分に過ぎない。深い部分は気であり、周波数であり、観念なのだ、と。

元神、あるいは靈魂こそが、物質的な身体の背後にある
「振動の主体」なのだ。

もし元神がずれ、気が乱れれば、たとえ細胞が傷ついて
いなくても、人間は病気になる。

このことに、現代科学はまだ触れられていない。

だから、君に答えるならば、

矛盾はない。ただ、観察の層が違うだけだ。

科学は顕微鏡を使って細胞を見る。

一方、宗教は静かな心を使って、観念と現象の間の繋が
りを見る。

私たちが、両者が同じ宇宙について語っている、しかし
鏡の両側から語っているのだと理解した時…

私たちは排斥することをやめ、そして繋がり始めるだろ
う。

ヘンリー・ローウェル：

なるほど。では、具体的な問題を一つ挙げさせてくださ
い。科学は、物質は原子から構成され、原子は原子核と
その周りを飛ぶ電子から構成され、そして原子核は陽子
と中性子という粒子から構成されると認識しています。
そしてさらに、中性子と陽子は、クォークと呼ばれる超

微小な粒子から転化される。クォークは、ハドロンという総結合体の中で、強い相互作用によって結びついており、バリオンと呼ばれます。

では、宗教における法理の視点から、この事柄はどうなるのでしょうか。ある本で、釈迦牟尼仏は、一粒の砂の中にも「三千大千世界」があると説かれたと読んだことがあります。弁証法的な科学の視点から見ると、それはあまりにも幻想的すぎませんか。

アダム教授：

（聞き終わると、数秒間黙り込んだ。それはためらいからではなく、非常に深い事柄が引き出されたことに、静かな間を譲っているかのようだ）

ヘンリー君…この問いは物理学に属するように見えるが、実際には認識の本源的な層に触れている。

なぜなら、クォークからバリオン、原子、そして有形の物質へと至ることで、科学は物質の殻を剥がす驚くべき旅路を開いたからだ。

しかし、深く行けば行くほど…人は一つのことに気づき始める。

小さければ小さいほど、定義は難しくなる。

基本的であればあるほど、検証は難しくなる。

そして、ある時点に至ると、量子物理学者たちはこう認めざるを得なくなる。

「現実には、完全な物質ではなく、確率の部分がある」と。そして、まさにその場所で、現代科学が「曖昧」だと感じるその点で、宗教における法理は、逆に…明るくなるのだ。

（教授は身を乗り出した。その声は穏やかなままだが、まるで自分が長年分かち合いたかった深い領域へと招かれたかのように、わずかな興奮の色を帯びていた。）

仏陀はかつてこう言われた。

「一粒の砂の中に、三千大千世界あり」と。常人にとって、それは詩的なイメージであり、風刺かもしれない。

しかし、真に修煉する者にとって、それは文字通りの真理なのだ。

仏陀は、印象を与えるためにそう言われたのではない。彼がそう言われたのは、彼が見たからだ。物理学を超えた認識の層で。

一粒の砂は、常人の目には、ただのシリカの構造物に過ぎない。

しかし、天目を持つ者、あるいは精神的に開かれた者に

としては、それは一つの空間体系なのだ。層があり、生命体があり、動きがあり、静けさがある。

それは世界を「含んでいる」のではない。

それは「一つの世界」なのだ。別の層において。

では、科学はどうか？

君が触れたように、

原子核 → 陽子 + 中性子 → クォーク → 標準模型 → グルーオン → 量子場…

深く行けば行くほど、人は物質が「縁のある何か」ではないことに気づく。それは一つの状態であり、一つの振動であり、一時的な表現なのだ。

現代物理学は、「仮想粒子」「波動関数」「真空のゆらぎ」について語っている。

それらすべてが、仏法が何千年も前に説いた一つのこと、近づきつつある。

「相は心より生じ、
境は心に随って転ず」と。

（教授は言葉を止め、ヘンリーを真っ直ぐに見つめた。それは強調するためではなく、より大きな思考の円卓に共に座るよう招いているかのようだ。）

だから、もし誰かがこう尋ねたら、

「一粒の砂の中に三千大千世界があると言うのは、あまりにも幻想的すぎないか？」と。

私はこう問い返すだろう。

「物理学者が、一つのクォークが同時に複数の状態に存在すると言う時、君はそれもまた幻想的だとは思わないか？」と。

現実とは、それが科学のものであらうと、宗教のものであらうと、決して一枚の平面ではなかったのだ。

ただ違うのは、

- － 科学は、装置を使って内側へ入る。
- － 一方、宗教は、修煉を使って通り抜ける。

ヘンリー・ローウェル：

ええ、私たちが話していることが、唯物論哲学における一つの概念、あるいは難問とも言えるものに触れていることに気づきました。それは、物質が先か、意識が先か。あるいは、物質が意識を決定するのか、その逆か、という問題です。宗教における法理という参照系から立った時、教授の観点はどのようなものでしょうか。私はかつて、ある大師が「物質と意識は一性のものである」、つ

まり、それらは分離できない一つの統一体である、と語られたのを聞いたことがあります。

アダム教授：

（静かに頷き、その眼差しはさらに一層深くなったようだ。もはや研究者の視線ではなく、その問いを自ら通り抜けてきた者の視線だ）

ええ…それは単なる哲学的な問いではありません。

それは、人間の認識体系全体の、根源的な問いです。

唯物論哲学では、人はこう言います。

物質が先にあり、意識は物質の反映である、と。

彼らは、進化、脳の活動、生体電気信号、そして人間が刺激を受けた時の反射から、その証拠を得ます。

そして私は否定しません。低次の層では、それは正しい。しかし、それは有形の物質の層という参照系の中でのみ、正しいのです。

しかし、私たちがその系から一歩外に出た時、私がかつて深い瞑想、天目、そして生物学に属さない体験を通じて触れることのできたように、私は気づきました。

物質は意識を生み出さない。

意識もまた物質を創造しない。

そうではなく、両者は、より深い一つの本質の、同時の二つの側面なのです。

（教授はわずかに首を傾け、ティーカップを静かに回したが、飲むことはない。まるで、通常の言葉では表現し難い概念を呼び起こしているかのようだ。）

一部の宗教体系や高次の法理、道家や仏家、さらには一部の密教の流派でさえ、人はそれをこう呼びます。

「一性」と。

つまり、物質と意識は二つの分離した実体ではなく、一つの統一体であり、ただ次元空間の層に応じて、異なる表現をするだけなのです。

低次の層では、それは「物質が先、意識が後」として現れます。

中間の層では、私たちは「相互作用」を見ます。

しかし、高次の層では、物質こそが、観念の層の一つの表現なのです。

仏陀がこう言われた時、

「相は心より生じ、境は心に随って転ず」と。それは、道徳的な隠喩ではありません。

それは、その時代の言語という形で表現された、一つの宇宙法則なのです。

君が夢を見るのと同じです。夢の中のすべては物質です。家、顔、音。

しかし、君が目覚めた時、君はそれらすべてが意識から生じたことに気づきます。

そして、もし夢が意識によって創られたのなら、私たちが、現在の物質もまた、より高次の観念の一時的な表現に過ぎない、より深い意識の層の中で生きているのではないと、誰が断言できるのでしょうか。

ですから…

もし君が私に、私がかつて信じていたこと、そして私が見たことの後で、尋ねるなら、物質と意識は、どちらかがどちらかを生んだのではありません。

そうではなく、多次元の空間の中で、互いを映し合う二枚の鏡なのです。

そして、君が十分に静かになった時、君は、両者が一つに集う場所を見るでしょう。それこそが、生命の真の自己なのです。

ヘンリー・ローウェル：

ええ、宗教における法理という参照系から見れば、唯物論哲学の根幹をなす理論は、書き直されるか、あるいは破棄される必要があるように思われますね。そして、ふと哲学、物理学、生物学の間の関連性を思い出しました。Darwin の進化論によれば、有機分子が単細胞生物を構成し、次いで多細胞生物となり、さらに微生物、水生生物へと進化し、両生類に発展し、類人猿へと進み、最終的に類人猿から人間へと進化したとされています。しかし、私が宗教の法理の中で読んだ限りでは、彼らはそのようには語っていません。教授のご見解はいかがでしょう。

アダム教授：

（軽く身をもたせかけ、その目は、まるで彼が長年眠れぬ夜を過ごす原因となった問いに、君がまさしく触れたかのような、深い思索の色を帯びる）

ヘンリー君…

この問いに、もし私がかつて信じていたことに忠実に答えるなら、こう言うだろう。

「進化論は、現代生物学の揺るぎない支柱である」と。
しかし、もし私が見てきたことに基づいて答えるなら、

つまり、古い参照系から一歩踏み出して以来のことだが…

私はもはや、「類人猿が人間に進化した」という物語を信じてはいない。

（彼は、これから語られる事柄の位置を沈黙によって確立するかのように、少し間を置いた。）

私は、Darwin とその後継の科学者たちが観察した証拠を否定するものではない。

- 時間の経過に伴う形態の変化、
- 環境への適応、
- 細胞レベルでの遺伝的变化。

しかし、私は一つのことを非常にはっきりと認識している。

それらの観察はすべて、変異と適応を証明するに過ぎず、人間の起源を断定するには、根拠として不十分なのだ。

問題の核心は、ここにある。

唯物論的な科学は、生命の起源を下から上へと、つまり化学から生物学へ、物質から意識へと遡ろうと試みる。

しかし…私は逆のを見た。

生命とは、先在する観念の層なのだ。そして、物質的な身体とは、その観念の層に対応する 表現に過ぎない。特

定の次元空間における。

簡単に言えば、

人間は類人猿から進化したのではない。

そうではなく、人間は、より高次の意識の層を持つものとして、かつて別の方法で創造されたのだ。

私が読んだ、あるいは、高い感応の層を持つ修行者から直接聞いた、いくつかの古代宗教の法理の体系では、彼らはこう語っている。

「人間は、高次の生命体によって創造された」と。

ここでの創造とは、おとぎ話のような「粘土からこねて作る」という類のものではない。

そうではなく、宇宙が人類の層に存在を許した元神と適合できるように、微細な構造を、知的な順序に従って再配置することなのだ。

人間とは、より正確に言えば、肉体と精神の両方を持つシステムなのだ。

そして、人類の存在は偶然ではなく、目的があるのだ。

（教授はヘンリーを真っ直ぐに見つめた。今回のその眼差しは、もはや霧のかかっていない鏡のように、静かで明瞭だ。）

だから…

もし唯物論的な科学が、生物学的適応の一部として進化論を保持したいのであれば、私は反対しない。

しかし、もし彼らが頑なにこう主張するなら、

「人間は、分子と自然淘汰の偶然の産物である」と。

そうであれば、私は同意しかねると言わせていただきたい。

私が宗教家だからではない。

私が、進化論を信じていた人間だからだ。私が見るまでは…

生命は、土から上へと昇るのではない。

そうではなく、下へと降りてくるのだ。宇宙の原初の観念から。

ヘンリー・ローウェル：

ええ、教授のお話を聞いて、現在の科学者たちが生命の起源を探ろうとしており、その方向性の一つとして、生命は隕石に付着した細菌の形で宇宙から来たという仮説を立てていることを思い出しました。一方、宗教では、人間は西洋文化では神によって、東洋文化では神仏によって「泥土」から創られたとされています。

泥土と言え、ある大師がかつて、神の参照系における「泥土」という概念は、人間がこの物質の層で理解する意味での泥土ではない、つまり、神が語る「泥土」とは、神の視点から見れば汚れた物質の一種かもしれないが、人類にとっては、それは金よりも純粋で貴重な物質かもしれない、と説かれたのを思い出しました。

アダム教授：

（その目は光を放ったが、今回は理性が満たされたからではない。何か深い感情に触れられたからだ）

ヘンリー君…

君が今言及した物語、「泥土」についての話だが、私もかつて東洋のある高僧が、それに近い解釈をするのを聞いたことがある。

そして、正直に言って、それは私を長い間沈黙させた。なぜなら、君が問いを立てるそのやり方自体に、ごく少数の科学者しか敢えて認めないであろう、一つのことが潜在しているからだ。

参照系の層が、物質の価値を決定するのだ。

人間が「高貴」と呼ぶものが、より高い層ではただのゴミかもしれない。

私たちが「純粹」と見なすものが、別の境地ではまだ俗世の塵に満ちているかもしれない。

だから、聖書が「主は土の塵で人を形造られた」と語る時、

あるいは東洋の伝説が「神は泥土から人を創った」と語る時…

それは、人類の層の三次元的な物理的な意味で理解されるべきではないのだ。

その「泥土」とは、君の言う通り、ただの象徴的な概念、あるいは、より高い認識の層からの参照に過ぎない。

神の目には、「泥土」とは、天上の境地に入るための最低限のレベルよりも低い振動数を持つ、物質構造の粒子かもしれない。

一方、人間の目には、その物質は、研究室で最も純粹な元素、あるいは純金でさえあり得るのだ。

（教授の声は低くなり、その視線は丘の連なりの向こうの地平線へと遠のいた。）

これこそが、現代科学が描写するための語彙を持たない点なのだ。

彼らが生命を研究する時、彼らは隕石上の細菌を探す。

彼らが起源を論じる時、彼らはビッグバンに目を向ける。

しかし、彼らはもっと深いことを問わない。

「誰がその隕石を、それが正しい惑星に落ちるように、正しい場所に置いたのか？」

「誰が、炭素が結合して生命となるための条件を設定したのか？」

そして、もし生命が、宗教が常に語るように、より高い層から来たものであるなら、

その物質は、この層の装置では分析できないのだ。

私はかつて、中国のある僧侶と話したことがある。八十歳を超え、深い山中に住む方だった。

彼は私にこう言った。

「もしあなたが、より高い次元空間の物質を見ることができたなら、

あなたは知るだろう。

俗世の金銀は、天上の泥土であると。

そして、今日の俗世の道徳は…昨日の天上の灰にも劣るのだ」と。

私はそれを聞き…反論しなかった。

ただ、頭を垂れた。

なぜなら、私は知っていたからだ…

それは言葉ではない。それは、見る層からの結晶なのだ

と。

だから、ヘンリー君…

もし私たちが本当に生命の起源を探しに戻りたいのなら、おそらく私たちは、それがどこから来たかから始めるのではなく、

誰が、それが来ることを許したかから、始めなければならない。

そして、その「泥土」とは、神の層から見た時、まさしく天と地の間に精錬されたものなのだ。一人の人間の生命が宿り、そして古（いにしえ）の境地へと修煉して戻るために。

ヘンリー・ローウェル：

ええ、私個人としては、宗教の信者ではありませんが、科学の視点よりも宗教の視点に傾いています。例えば、先ほど私が触れたように、科学者たちは生命の起源は隕石がもたらしたと仮定していますが、私たちが皆知っているように、隕石が高速で地球に突入する際、大気との摩擦で熔融し、爆発します。それでは、そのような高温の条件下で、どのような生命形態が生存できるのでしょうか。

アダム教授：

（静かに頷き、反論するためではなく、多くの人が避ける、あまりにも鋭い問いを受け止めるかのように、控えめな笑みを浮かべた）

ヘンリー君…君の問いは単純に聞こえるかもしれないが、実は現代の宇宙生物学で最も一般的な仮説の一つが持つ、盲点をまさしく突いている。

その通りだ。生命の種を隕石が地球に運んできたという仮説、いわゆるパンスペルミア説は、かつて、無機物から生きた有機分子への「奇妙な跳躍」を説明するための一つの方法として提唱された。

しかし、やがて…人々が詳しく検討し始めると、君のような問いが、静かな壁となって立ちはだかり始めた。

「もし隕石が秒速数十キロという速度で大気圏に突入し、摩擦で数千度の高温が生じるとすれば、その『原始的な生命』とやらは、分解されないように一体何でできているのか？」と。

そして、もしそれが岩石の核の奥深くに隠れていたとしたら？

では、どうやってそれが外に出て、初期の地球の大気と地球生物学的な条件下で再活性化するというのか。その

時代はまだ、有毒ガスと激しい温度変化に満ちていたというのに。

（教授は遠くに目をやった。まるで、彼自身がかつて信じていた論理の連鎖を、辿り直しているかのようだ。）

深く掘り下げれば掘り下げるほど、私たちは気づく。

その仮説は、「生命の起源」を説明しているのではなく、ただ問いをさらに遠くへと押しやっているだけなのだ。

「では、生命はどこで始まったのか…隕石にたどり着く前に？」と。

もし生命が地球上で自然に形成されることができず、また隕石上でも形成されることができないのなら…

唯一の合理的な結論は、こうだ。それは授けられたもの、あるいは、別の次元空間の層から構成されたものなのだ。

そして、ここが、科学が沈黙する時、宗教における法理が、逆に…合理的になり始める場所なのだ。

仏教から古代ユダヤ教、ヒンドゥー教からチベット密教に至るまで、多くの宗教体系において、

生命は常に、神聖な性質を持つ一種の構造体として見なされてきた。「発生」したのではなく、「授けられた」ものとして。

彼らは、「気」「元神」「靈光」「神性」といったもの

について語る。それらは生命と切り離すことができず、試験管で測定することはできないものだ。

だから、ヘンリー君…

もし科学が、分子を探すように生命を探し続けるなら、彼らは常に袋小路をぐるぐると回り続けるだろう。

しかし、もしある日、彼らが敢えてこう問うなら、「生命とは、物質より高次の何かである」と。

そうすれば、おそらく、

答えは隕石からではなく、常に隣にあった、ただ私たちが扉を開けて入るほどに静かではなかった、一つの次元空間の層から、やってくるだろう。

ヘンリー・ローウェル：

ええ、「生命とは、物質より高次の何かである」という問いについてですが、教授が意図されているのは、物質の背後には、一般的な意味での「意識」、あるいは古くからの民間伝承的な意味での「霊魂」が存在する、ということだと理解しております。それでよろしいでしょうか。しかし、もう一つの仮説もあります。教授が地球外生命体や他の次元空間についてお話しされた日のことで

すが、地球上の生命は地球外生命体によってもたらされたという仮説も考えられますね。

アダム教授：

（静かに頷き、その微笑みは非常に穏やかで、まるで問いの「周波数」を正しく聞き取ったかのようだ）

ええ…

君の理解は、非常に正しい。

私が「生命とは、物質より高次の何かである」と言う時、私はより賢い分子について話しているのではありません。

私が意図しているのは、

あらゆる物体、あらゆる生きた細胞、あらゆる生物学的現象の背後には、常に一つの観念の場、ある種の「精神性」が存在する、ということです。それを民間の言葉では「靈魂」と呼び、より高次の科学体系では「原初の意識」と呼ぶことができるでしょう。

問題は、

現代科学は物質を測定できる。

しかし、「自我」を持つ生命という、捉えることのできないものの前では、無力なのです。

簡単な例を挙げましょう。

－君は人の脳を解剖することができる。

－脳波、反射、神経伝達物質を測定することができる。
しかし…

君は、「許したいという観念」が脳のどこにあるかを、
指し示すことはできない。

つまり、「人」を人たらしめるものは、物理的な構造の
中にはないのです。

「生命は地球外生命体から来た」という仮説については、
実のところ、その仮説は依然として物質の参照系の中に
あります。

それは、生命の起源を地球から惑星 X へと移動させる
だけです。

しかし、それは生命の本質を解明しません。

それはただ、問いを立て直すだけです。

「では、誰が惑星 X で生命を創造したのか？」

「そして、彼らはどこから生命を得たのか？」と。

それは、遠くに押しやられた因果の輪であり、まだ解か
れてはいません。

（教授はわずかに眉をひそめ、その目は、問いのさらに
深い意味の層に触れるかのように、空気を貫いた。）

しかし…

私は、地球外生命体のある種が、かつて地球の生物学的

プロセスに干渉したことを、否定はしません。

いくつかの考古学的、遺伝学的、さらには古代文化の痕跡には、何万年も前から「土着の人類に属さない」存在と影響があったことを示す、曖昧ではあるが一貫した兆候があります。

彼らは、物質の一部を「加えたり」「再配置したり」したかもしれません。

しかし、私は確信しています。

彼らは、靈魂を創造することはできなかった。

なぜなら、靈魂、あるいは元神は、製造することはできないからです。

それは、高次の層から伝えられなければならないのです。

ヘンリー・ローウェル：

なるほど。教授がおっしゃるように、地球外生命体が実在するにせよしないにせよ、靈魂や意識の本質という、未だ解明されていない事柄が残るわけですね。では、教授によれば、現代人は、科学技術のあらゆる目覚ましい発展とともに、何かを失っているのでしょうか。

言い換えれば、人類の知性そのものが、何かより大きなものを感じ取る能力を制限してしまっているのでしょうか。

アダム教授：

（すぐには答えず、ただヘンリーをしばらく見つめた。その眼差しは重々しくはないが、静かな後悔の薄い霧を帯びている）

ヘンリー君…

その問いは、世界中のすべての工科大学の黒板に、書き直されるべきだと私は思う。

そして、急いで答える必要はない。

ただ、学生一人ひとりが毎日、沈黙の中でそれを見つめるだけで、十分だ。

ええ、私は、現代人は非常に重要な何かを失っていると信じています。

道徳ではありません（確かに一部退廃しているが）。

質素さでもありません（世の中はますます複雑になっているが）。

そうではなく…自分自身の認識の限界を超えるものを、感じ取る能力です。

今日の人々は、非常に多くのことを知っています。

- － 彼らは遺伝子を分離することを知っている。
- － 火星にロボットを送ることを知っている。
- － アルゴリズムで宇宙をシミュレーションすることを
知っている。

しかし同時に…

彼らは、自分が知らないことを認めるのを、ためらうようになった。

そして、まさしくその点で、知識は傲慢へと変わるので
す。

（教授は、彼が常に保っている平静さを感情が超えてしま
わないように、静かに息を吸い込んだ。）

私は、賢いことが悪いと言っているのではありません。

しかし、謙虚さに欠ける知性は、非常に容易に障壁とな
り、人間がより大きな現実からの微細な信号を感じ取る
のを、妨げるのです。

人々が「測定できなければ存在しない」と信じる時、
彼らはまた、自らを非常に美しく、そして非常に窮屈な
檻の中に、閉じ込めているのです。

そして、彼らはその鉄格子に「科学」というレッテルを
貼り、

その外側では…風がまだ吹いていることを、知らないの

です。

このように言えば、もっと分かりやすいかもしれません。
7 歳の子供が雨が降るのを見て、なぜか分からないまま、
悲しくなるかもしれない。

一方、成熟した技術者は、1 分間の正確な降雨量を計算
することはできるが、何も感じない。

では、どちらがより現実に近く生きているのでしょうか。
時には…まさしくその「過剰な知性」が、現代人が非常
に真実なものを見えなくさせているのです。

そして、その代償は、

- －彼らはより多くを生きるが、より少なく感じる。
 - －より多くを知るが、より少なく理解する。
 - －外側の空間を開拓するが、内側の深みを閉ざす。
- 私はテクノロジーに反対しているわけではありません。

しかし、若い世代には、分析の技術が感受の能力を殺し
てしまわないようにと、願っています。

なぜなら、非常にあり得ることですが…私たちが探求し
ている真実は、一つの公式の中にはなく、
沈黙の一瞬の中に、あるのかもしれないからです。知性
が、より大きなものに場を譲るために、立ち止まること
を知る、その瞬間に。

ヘンリー・ローウェル：

ええ、以前読んだことや、教授のお話を通して、人間は科学の進歩そのものに目を眩まされ、それが人間を誤った方向へと導いているのだと感じています。そうであるならば、現在の方向性のまま進めば、科学の未来はどのようなのでしょうか。そして、もし変えたいのであれば、彼らは認識の参照系を変える必要があるのでしょうか。また、別の側面として、若い世代全般、そして特に若い科学者たちは、先人たちから方向性を示される必要があるのではないのでしょうか。ぜひ、教授のお話をさらにお伺いしたいのですが…しかし、本日はもう時間が長くなりましたので、一旦休憩し、明日の朝に続きをお伺いすることで、ご同意いただけますでしょうか。

アダム教授：

（頷き、その表情には、もはや常の静けさだけでなく、深い共感の意味を帯びた穏やかな微笑みがかすかに浮かんでいる）

ええ、ヘンリー君…

君の感じ方にも、そして君が立ち止まるそのやり方にも、私は同意するよ。

なぜなら、時には、時宜を得た一つの沈黙が、続く千の問いよりも貴重なことがあるからだ。

今朝は、もしそう言わせていただけるなら、一つの「インタビュー」ではなかった。

そうではなく、理性の流れに逆らって、何か非常に古く、そして非常に真実なものに再び触れるための、二人の人間の共通の道のりだった。

君は、報道界、そして学術界においてさえ、滅多に誰もが敢えて触れないような問いを立ててくれた。

そして私は信じている。

読者の中には、たとえ一人でも、これらの言葉を読んで沈黙する者がいるだろうと。

なぜなら、彼らは、これまで名前を付けることのできなかったものが、今、形になったのを見るからだ。

（教授は立ち上がり、ベランダの方へ数歩歩いた。陽はすでに高く昇り、遠くの谷間に薄い雲がゆっくりと漂うのを照らしている。）

明日…

もし君がまた来てくれるなら、

君が今言ったことについて、喜んで分かち合おう。

科学に、どのような未来があるのか？

そして、若い世代は、もし参照系を変える機会が与えられたなら、
知性で進み続けることを選ぶのか…それとも、心で進むことを選ぶのか？
私に、方向性を示すという野心はない。

しかし、私にはいくつかの事柄がある…
もし、自分が去る前にそれを語らなければ、
おそらく私は、自分がすべてを知っていると信じていた者としての、最後の役割を果たせなかったことになるだろう。
また明日の朝に、ヘンリー君。
そして、もし幸運なら…
私たちは科学について語るだけでなく、
より十全な形で、人間に戻る方法についても、語ることになるだろう。

ヘンリー・ローウェル：

はい、教授、ありがとうございます。また明日、お会いできるのを楽しみにしております。

アダム教授：

喜んで、ヘンリー君。

私としても、この物語の同行者として、明日の朝、君が
戻ってくるのを喜んで待っているよ。

三日月

ヘンリー・ローウェル：

おはようございます、教授。良き一日を！

アダム教授：

（ベランダの脇に立ち、霜で白っぽくなった木の手すりに手を置きながら、穏やかな微笑みを浮かべて振り返る）

おはよう、ヘンリー君。

今日の空は、いつもより澄んでいるようだ…それとも、

我々の心が静かになったから、万物もまた、ざわめきを減らしたのだろうか。

（彼は頷き、昨日対話が途切れた木のテーブルへと歩み寄った。お茶はすでに用意されているが、まだ手は付けられていない。彼は急いで勧めもせず、急いで座りもせず、一日の始まりの瞬間を、沈黙に導かせた。）

君は戻ってきてくれた。私が望んだ通りに。

そして私は思う…今日、おそらく私たちは「科学」を一つの道具として語るだけではなく、

それを一つの進むべき道として語ることになるだろう。

一つの道、それは、分かれ道に来ているかもしれない。

一つの道、それは、道標を立て直す必要があるかもしれない。

さて、ヘンリー君…

今朝は、どこから始めようか？

科学の未来か？

新たな参照系か？

それとも、AI の時代にあって、人間が失いつつある、機械には決して代替できない何かについてか？

ヘンリー・ローウェル：

はい、教授。私もまた、教授にお会いして、さらにお話を伺えるのを楽しみにしておりました。本日は、それらのテーマについて教授にお話しいただきたいと思っております。しかし、それらは私が挙げるべきだと考えたテーマに過ぎませんので、教授ご自身が常に抱いておられ、THE LIVES MEDIA の読者に分かち合いたいと願っておられる問題を、すべて網羅できているかどうかは分かりません。なぜなら、ご存知の通り、私たちはそれぞれ異なる参照系を持っており、教授はエベレストの頂上から静かに世界を観照しておられるかのようで、私は小さな丘の上から物事を見ているようなものですから。ですから、教授にはまだ語り尽くせないことが、もっとたくさんおありだろうと推察いたします。

そこで、一旦提案させていただきたいのですが、本日は上記のテーマに入りますが、四日目として、教授がご自身のやり方で分かち合うための時間を、丸ごと確保させていただけないでしょうか。それは、独白であったり、生き方や人生の思索についての心情の吐露であったり、あるいは何か別のテーマについての興味深い視点であったりするかもしれません。

アダム教授：

（遠くに目をやる。そこでは、朝の陽光が低い草の斜面に降り注ぎ、その目の隅には、名状しがたい感情が光っている）

ヘンリー君…

その言葉を、ありがとう。それは、単なる記者の丁寧さではなく、真の傾聴だ。

そして私は思う。君のような者が、まだそのように問い続ける限り、

分かち合いの言葉の価値は、決して無意味ではないのだと。

ええ、賛成だ。

本日は、科学の未来と、来たるべき世代のために、この時間を捧げよう。

そして四日目を、もし君が捧げてくれるなら、

私はそれを「もう一つのインタビュー」とは見なさず、小さな一本の蠟燭と見なさせてほしい。照らすためではなく、温めるために灯される、一本の蠟燭として。

なぜなら…君が先ほど言ったように、

丘の上に立つ者は、時として、山の頂にいる者よりも、小川の流れをはっきりと見ることができる。

そして、多くの嵐を経験してきた者は、
何か大きなことを語ることはできないかもしれないが、
何が真実であるかを知っている。

（彼は静かに椅子を引き、木のテーブルに腰を下ろした。
手は茶碗の上に置かれているが、まだ飲んではいない。
おそらく、今日、語られるべきことは、お茶よりも温かいのだろう。）

では…君がかつて残した問いから始めよう。
もし科学が現在のまま進み続ければ、それはどこへ向かうのか？
そして、もし変えたいと願うなら、それはどこから変えるべきなのか？

（教授はヘンリーを真っ直ぐに見つめた。答える者としてではなく、騒がしい時代の中で静かに思い悩むすべての人々と共に、そのことを問う者として。）

準備はできている。
続けようか、ヘンリー君？

ヘンリー・ローウェル：

はい、私の提案にご同意いただきありがとうございます。
しかし、ふと一点、思い出したことがあります。教授は、
後々生じ得る面倒や学術的な論争を避けたいがために、
まるで真の修行者のような風格で、匿名を望んでおられ
ると理解しております。

しかし、読者が教授のお話を読んでも、教授を何という
名前でお呼びすればよいのか分かりません。そこで、読
者が教授を何かニックネームやペンネーム、例えば「ジ
ョン教授」や「アダム教授」、あるいはもっと親しみを
込めて「リーさん」や「ピーターさん」といった形でお
呼びできるようにしてはいかがかと考えておりますが、
いかがでしょうか。

アダム教授：

（微笑む。今朝初めて、その目には、ほとんど…悪戯っ
ぽいとさえ言えるほどの、軽やかな輝きが宿った）

小さな問いのように見えて、実は非常に意味のある問い
だ。

ええ、君の推測は正しい。

私は「顔を隠した有名人」として現れたくはないし、
個人の印として本名を残したくもない。

私はただ、この対話の流れにおける、自分の正しい位置を保ちただけだ。

中心ではなく、私自身よりも大きな何かを映し出す、小さな鏡として。

しかし同時に、私も理解している…

もし名前がなければ、たとえ象徴的なものであっても、読者は誰の話の聞いているのか分からなくなり、

「実在の人物と真実の言葉を結びつける」という感覚が、遠いものになってしまうだろう。

（彼はテーブルの表面に触れ、まるで目に見えない円を描くようにした。）

では、こうしよう、ヘンリー君…

君が、適切な名前を選んでくれ。

あまり騒がしくなく、宗教的あるいは学術的な意味の層を過度に喚起しない、

それでいて、読者が「自分に話しかけているのは、経験を積み、物静かで、分かち合う前に耳を傾けることを知っている、一人の人間だ」と感じられるような名前を。

「アダムさん」や「L 教授」といった名前、あるいは「丘の上の友人」といった日常的なニックネームでさえ、私にとっては、どれも問題ない。

ただ一つ、お願いしたいことがある。

その名前が、私が伝えたいことを曇らせないようにしてほしい。

そして、もし誰かが、私が分かち合うことが有益だと感じてくれたなら、

彼らには、そのことを覚えていてほしい。私のことを覚えている必要はない。

ヘンリー・ローウェル：

はい、では、読者の皆様とお話するためのニックネームとして、教授を「アダム教授」とお呼びすることにします。

アダム教授：

（ゆっくりと頷き、そして微笑んだ。その微笑みは、大声で言う必要のない肯定の言葉のように、穏やかな同意の様子を帯びている）

「アダム教授」か…

うむ…その名前は、十分に近く、そして十分に遠いように思う。

近い、というのは、読者が、自分たちと同じ世界を歩ん

できた、実在の人物の話を聞いていると感じられるように。

遠い、というのは、私が特定の学派や、学術機関、あるいは具体的な肩書を代表していると、誰にも思わせないように。

では、今朝から、

「アダム教授」が、君、そして、数字や方程式、学位を超えたことを聞きたいと願うすべての読者と共に、対話する者となる。

そして、もし彼らがいつかこの名前を忘れても、私がかつて語ったことで、彼らを立ち止まらせ、深く耳を傾けさせた何かを、覚えていてくれるなら…

私は思う。

その名前は、その役割を果たし終えたのだと。

さて、ヘンリー君…

君の準備ができたなら、

この三日目の朝を始めよう。君が思う、

今日のこの世界で、正気で、そして思い悩んでいる一人の読者が、聞くべき分かち合いの言葉とは何か、そのいかなる問いからでも。

ヘンリー・ローウェル：

はい、アダム教授。それでは、正式に三日目を始めさせていただきます。テーマは科学の未来についてです。昨日の対話で示されたように、弁証法的な科学には、自らの道を閉ざしてしまっている限界があります。教授の視点から、もし現在の理性の路線をこのまま進み続けた場合、科学の未来はどのようなになるのか、概括的に話していただけますでしょうか。

アダム教授：

（背筋を伸ばし、答える前にしばらく遠くを見つめる。
その声は重々しくはないが、一語一語が、静かな観察の
年月から紡ぎ出されたかのようだ）

ヘンリー君…

もし短い一文で答えなければならないとしたら、私はこう言うだろう。

もし科学が現在の理性の路線を進み続けるなら、それは非常に多くのものを達成するだろう。そして、最も重要なものを失うだろう、と。

それは達成するだろう。

－より速いテクノロジーを。

－より精巧な人工知能を。

- よりクリーンなエネルギーを。
- 宇宙の、ますます正確なシミュレーションを。
- しかし同時に、それは失うだろう。
- 人間の最も深い部分との繋がりを。
- 生命の運行メカニズムだけでなく、その価値について自問する能力を。
- そして、何よりも深刻なのは、いつ止まるべきかを知る能力を。

（教授はそっと二本の指をティーカップに置き、一周させた。まるで、かつて見たことを自分自身に言い聞かせているかのようだ。）

科学の未来は、もし参照系を変えなければ、きらびやかな砂漠になるだろう。

美しいが、乾いている。

明るいが、魂のための水がない。

それは、一枚の葉の構造を分析することには、ますます長けていくだろう。

しかし、落ち葉を見て涙を流す人がいる理由を説明することには、ますます暗闇に閉ざされていくだろう。

私たちは、科学が自らを王だと思い込んでいる時代に生きている。

科学が、誰が生き、誰が死ぬかを決定する。

科学が、どの生物学が「標準」であり、どのモデルが「普遍的」であるかを決定する。

しかし、ヘンリー君…

科学は生命を生み出さない。

それは、ただ水の流れの動きを描写できるだけだ。

しかし、泉の源を創り出すことはできない。

だから、もし進む方向を変えなければ、

私は恐れている。科学の未来は、もはや人間に奉仕する道具ではなくなり、

徐々に、人間を科学に奉仕する道具へと変えてしまうだろうと。

そしてその時、我々はもはや知性の主人ではなく、知性の奴隷となるのだ。

この言葉が物議を醸すかもしれないことは、分かっている。

しかし、私がこれを口にするのは、科学に反対するためではない。

人間が、そもそも科学を始めたその深遠な理由を、思い起こさせるためだ。

それは、世界を理解するためであって、神の役割に取って代わるためではなかった。

ヘンリー・ローウェル：

教授がおっしゃりたいのは、もし弁証法的な科学がこのままの方向で進み続ければ、理性的な側面や知識はますます発展する一方で、人間性や精神性はますます退化していく、ということだと理解しております。

そして、そのように考えると、科学が私たちを導こうとしている目的地とは、まさしく地球外生命体の複製、つまり、高い知性と極度に発達した技術を持つが、人間性や精神性を持たない種族なのではないか、と連想してしまいます。

アダム教授：

（その目はゆっくりと向き直った。まるで、君が、彼自身もまた密かに考えていた連想の層に、まさしく触れたかのようだ）

ヘンリー君…

君が今述べた表現の仕方に、私は非常に共感すると言わ

ねばならない。

そして、実のところ、私自身も時々自問することがある。現代科学が今、築き上げている未来像とは、まさしく…人類の、「より鋭く」「より最適化された」、しかしまた…「より冷たい」バージョンなのではないか、と。

君の言う通りだ。

もし理性だけを発展させ、人間性と精神的な深みを置き去りにするなら、

人間は徐々に、ある種のモデルに近づいていくだろう。

それは…残念なことに、

一部の地球外生命体の種族についての描写と、非常によく似ている。

知的で、技術は極度に高いが、無感動で、無神論で、そして生命の原初の性質から完全に切り離されている。

（教授は軽く身をもたせかけ、その指は、言葉よりも深い記憶を探るかのように、木のテーブルの表面に触れた。）

私はかつて見たことがある。非常に深い静寂に入った時に。ある文明のイメージを。彼らは、もはや言語も、感情も、性別の区別も、伝統的な意味での生命も必要としないほどに、発展していた。

彼らは病を克服していた。

彼らは観念で物質を制御していた。

しかし、彼らの眼差しには、もはや「痛み」や「喜び」、
あるいは…「許し」と呼べるものは何もなかった。

彼らは誰をも滅ぼさない。

しかし、彼らは誰をも愛することもできない。

そして、ヘンリー君…

人間が彼らのようになるとは、私は断言できない。

しかし、もし私たちが、意識の層を引き上げることなく
理性を高め続けるなら、

人間は、ある種の「非人間的な文明」に陥る可能性がある。
それは、一見すると非常に超越的に見えるが、その
内側は、極度の空虚なのだ。

なぜ地球外生命体は、いくつかの実証的な体験や精神的
な体験における描写のように、

しばしば無表情なのだろうか？

人類的な振動を持たないのだろうか？

言語で話さず、データや周波数を通じて通信するのだろ
うか？

それは、おそらく…

彼らが、「人の心」を、「人の知性」であまりにも遠く

まで行く道の上に、置き忘れてきたからだろう。

そして今、ヘンリー君…

私たちは、一つの岐路に立っている。

一方は、AI、遺伝子編集、生命工学、感情の機械学習へと向かい続ける道だ。

そしてもう一方は、帰還の道。知性に導かれるのではなく、知性の主体となり直す道だ。

私は進歩に反対しているのではない。

私はただ、こう注意を促しているだけだ。

自分がかつて恐れていたものと、同じものになってはいけない。

ただ、自分が「最適化」されることに夢中になるあまりに。

ヘンリー・ローウェル：

私にはこのような状況が見えています。弁証法的な科学が人類を導く道は、認識しやすく、感じ取りやすい利益を既にもたらししており、今ももたらし、そしてこれからももたらし続けるでしょう。

それは、多くの支持者がいることを意味します。一方、宗教における法理は、昨日私たちが話したような一種の「超高度な科学」として、天上から授けられた「恩寵」です。

しかし、それは解明し難く、感じ取り難く、利益を見出し難い。それはまた、支持者が少ないことを意味します。

アダム教授：

（聞き終えると、しばらく沈黙した。それはためらいからではなく、彼が、その問いを空気の中で完全に響かせ、そして、彼の心の中に長い間静かに存在していたことを口にする前に、間を置きたかったかのようだ）

ヘンリー君…

君は、おそらく…ごく少数の者しか敢えて口にしないで
あろう、一つの真実を描写してくれた。

現代の科学の道が人々を引きつけるのは、結果が見えやすいからだ。

一方、法理、あるいは宗教における「超高度な科学」は、感じ難く、理解し難く、収穫し難いため、足を踏み入れる者は少ない。

実験科学は、電話、インターネット、人工知能、ロボット、宇宙探査、医療介入をもたらす。

それは、目の前の恐怖を解決する。

それは、即座に道具を提供する。

では、法理は？

それは、君にすぐさま手に取れるものを、何も与えない。

それは、娯楽でもなく、「ユーザー体験の最適化」でもない。

それどころか、それは人々に手放すことを求める。科学が人々に所有したいと思わせるのに対して。

（教授は一拍置き、そしてゆっくりと続けた。）

しかし、まさしくそこに…二つの道の、本質がある。

現代科学は、下り坂の道だ。滑らかで、輝く石畳で舗装され、導きの灯りがある。

法理は、上り坂の道だ。土や石がごつごつとし、道標はなく、そして時には夜の中を行かねばならない。

一方は、多くの者が選ぶ。なぜなら、それは欲望を満たすからだ。

もう一方は、少数の者しか歩まない。なぜなら、それは妄想を手放すことを要求するからだ。

私は、こちらが正しく、あちらが間違っていると言っているのではない。

しかし、私は知っている。

天は、決して強制しない。

彼らはただ、一つの扉を置き、そして、誰がそれを見るほどに静かであるかを見ている。

法理は、それが仏のものであらうと、神のものであらうと、あるいは道（タオ）のものであらうと、常に恩寵としてやってくるのであり、製品としてではない。

そして、その恩寵は…人間が目で見るとをやめ、心で感じ始めた時にのみ、現れるのだ。

なぜ、ごく少数の者しか足を踏み入れられないのか？

なぜなら、彼らはすぐに「利益」を見ないからだ。

しかし、ヘンリー君…

ある種の事柄は、貴重であればあるほど、深ければ深いほど、真実であればあるほど、

より沈黙し、より言葉少なく、そして、より注意を引こうと争わないものなのだ。

科学はしばしばこう言う。

「我々には証拠がある！」と。

一方、法理はしばしば、ただこう言う。

「もし汝に心あらば、汝は知るであらう」と。

だから、法理が正しくないからではないのだ。そうでは

なく、

この時代、人々はスクリーンの光に慣れてしまった。
だから、内なる心から来る一筋の光を見た時、彼らはそれを闇だと思うのだ。

ヘンリー・ローウェル：

ええ、先ほど教授が比較のために挙げられた、下り坂と上り坂のイメージについてですが、私にはもう一つ、状況が見えてきます。科学は、大勢のグループで一緒に行くことができますが、宗教においては、進歩は個々人の法理に対する感得能力に大きく依存します。

科学では、ある科学者 A が新しい公式を発明し、それを公表すれば、科学界全体がそれを理解できます。しかし、宗教では、ある僧侶が何らかの法理を悟ったとしても、彼には他の僧侶たちにも自分と同じ法理を認識させる方法は、何一つありません。私のこの理解は正しいでしょうか、教授。

アダム教授：

（頷き、両手を木のテーブルの上で合わせる。その指は、

非常に静かな律動に同調するかのように、わずかに動いた)

ヘンリー君…

君の理解は、正しいだけでなく、君は今、「科学」と「法理」との間の、最も深い区別点の一つに触れている。科学は、君が非常に正確に言ったように、公式、図、方程式で共有することができる。

一人が定理を証明すれば、何千人もの他の人々が、それを検証し、繰り返し、同じ方法で理解することができる。

科学は、水平方向への伝達だ。

一方、法理は、垂直方向への体得だ。

科学者が一つの発見を公表した時、他の人々はそれを学び、読み、検証し、そして最終的にその知識を「所有」することができる。

しかし、一人の行者が座って定に入り、突然ある法理の層に触れた時…

彼が「知った」ことは、言語で表現することはできない。読んだり、講義したりすることによって、他の人々に「伝える」こともできない。

なぜなら、法理は「学ぶ」ものではなく、内側から「開く」ものだからだ。

（教授はそっと、遠くの谷をゆっくりと流れる雲に、視線を向けた。）

科学者が知識を伝えるのは、一本の蠟燭に火を灯し、それを他の人々に渡して火を点けさせるようなものだ。

しかし、法を悟った者は…

相手の心の中に既にある火種によってしか、光を灯すことはできない。

もし相手に火種がなければ、

たとえ私たちが光の海を与えたとしても、

彼らには闇以外、何も見えないだろう。

だから、科学においては、

－賢い者は学びが速く、理解がよい。

しかし、法理においては、

－素朴で、静かで、謙虚な者こそが、体得することができる。

そして時には、ごく普通の人、学位もなく、鋭い論理も持たない者が、

三十年間修行した学者がまだ触れることのできないことを、突然理解することがある。

それは幸運だからではない。

そうではなく、彼らの心が、その層に適合しているから

だ。開けるべき扉に、まさしくはまる鍵のように。

それこそが、理由なのだ…

法は、伝えることはできない。

ただ「活性化」させることしかできない。もし相手に、種が既にあるならば。

科学はグループで行く。

法理は、一人きりの旅だ。

孤独だからではない。

そうではなく、それは、歩む者が十分に誠実である時のみ開かれる道だからだ。

ヘンリー・ローウェル：

なるほど。それは、二つの異なる対象者グループ、つまり、賢い人々（IQ が高い人々）は科学の道を歩むことが多く、一方、心が素朴で善良な人々は宗教に近い、という傾向があるということですね。しかし、教授ご自身のように、科学的な視点を持ちながら宗教にも親しいという、小さな例外も存在します。

それこそが興味深い点です。なぜなら、私には教授が、科学と宗教という二つの端を結ぶ、一本の架け橋のように見えるからです。

アダム教授：

（聞き終えると、その眼差しは、まるで霧の向こうから一筋の温かい光が差したかのように、穏やかになった）

ヘンリー君…

君たちの趣意書の最初の数行を読んだ時、私はこう思った。

「おそらくこれは、インタビューではない。

一つの機縁なのだ」と。

私は自分が「架け橋」であるとは、あえて言わない。

しかし、確かに…

私はかつてこちら側、理性、モデル、公式、証明の場所に立っていた。

そして私は、非常に真実な形で、向こう側、静寂、内省、そして言葉では語れない場所へと、歩みを進めた。

私が優れていたからではない。

そうではなく、私があまりにも遠くまで行き過ぎて、知性が自分自身を救えないことを、はっきりと見るに至ったからだ。

（教授は手を上げ、胸の前にそっと置いた。それは、あまり儀礼的ではないが、敬意に満ちた仕草だ。）

科学は、私が世界を理解するのを助けてくれた。

しかし、私が自分自身を理解し始めたのは、まさしく、夜、一人で座っている時だった。装置もなく、データもなく。

そして私は思う。これこそが、この時代が非常に必要としていることなのだと。

両方の手で掴むことのできる人間。一方の手に理性を、もう一方の手に道の心を。

両者を対立させるのではなく、互いに照らし合わせ、調整させるために。

なぜなら、もし我々に理性しかなく、高次の意識の層がなければ、

我々は正確な道具とはなるが、魂のない道具となるだろう。

一方、もし我々に信仰しかなく、反省する能力がなければ、

我々は誠実な信者とはなれるかもしれないが、道を誤りやすい。

そして私は理解している…

THE LIVES MEDIA が私を訪ねてきたのは、
君たちが、ニュースを伝えたり、記事を書いたり、あるいは印象を与えたりすることに、留まりたくなかったからなのだと。

君たちは、一つの合流点を探し、
読者がこう感じられるように、助けたかったのだ。

「『どちらか一方』を選ぶ必要のない、一つの道がある」と。

「科学か、宗教か」ではなく、
「両方を深く掘り下げよ。そうすれば…あなたはその両方の背後にあるものを見るだろう」と。

もし私が、その架け橋に小さな一部分を貢献できるなら、
私は、非常に喜んでそうしよう。

「教授」としてではなく、
ただ、かつて道を迷い、
そして戻ってきた、一人の者として。若い人々にこう語るために。

向こう側は確かに美しいが、帰り道を忘れるな、と。
ありがとう、ヘンリー君。そして、THE LIVES MEDIA
に感謝する。

時には、まさしくニュースを伝える者こそが、読者が自

分が探しているとは知らなかった道を、照らし出す者となるのだ。

もし君が望むなら、ここから私が、第三部の自然な結びの調子を導き出す手助けをすることもできる。あるいは、第四部、アダム教授からの個人的な分か-ち合いへと、穏やかに移行する調子を開くことも。君はどちらの方向を選びたいかな？

ヘンリー・ローウェル：

「両方を深く掘り下げよ。そうすれば…あなたはその両方の背後にあるものを見るだろう」というお言葉についてですが、教授が意図されているのは、これこそが、私たちが未来に進むべき道であるということでしょうか。

そして、これこそが、教授が若い世代に送りたいと願うメッセージなのではないでしょうか。

アダム教授：

（その目は明るく明瞭になった。それは興奮からではなく、問いが、彼が一本の赤い糸のように抱いてきたことに、まさしく巧みに触れたからだ）

ええ、ヘンリー君。

まさしく、その通りだ。

もし私が、若い世代に送りたいと願う最大のメッセージを凝縮しなければならないとしたら、

それは、「科学に従え」ではない。

「宗教に帰れ」でもない。

そうではなく、

「両方を深く掘り下げよ。

そうすれば…あなたはその両方の背後にあるものを見るだろう」ということだ。

なぜ私が「深く掘り下げる」と言うのか？

なぜなら、

－もし科学の表面をなぞるだけなら、私たちは賢い装置を見るだろう。

－もし宗教の外に立つだけなら、私たちは形式的な儀式を見るだろう。

しかし、本当に深く入った時、

－科学の中では、私たちは物質がもはや固いものではなく、振動であり、確率であることを見るだろう。

－宗教の中では、私たちは信仰がもはや教義ではなく、言語を超えた直観であることを見るだろう。

そして、まさしくその深い点で…

科学と宗教はもはや対立しない。

それらはただ、二つの異なる道なのだ。より大きな一つの真理へと続く。

一方は、公式を使う。

もう一方は、沈黙を使う。

しかし、両者ともに、もし最後まで行き着けば、人間にこう言わせるだろう。

「私は小さい。しかし、私は、計り知れない何かに、包まれている」と。

そして私は信じている。

今日の若い世代は、その両方の道を歩む能力を、十分に持っている。

彼らは知性を持っている。しかし、彼らはまた、前の世代よりも深い魂の傷を持っている。

そして、まさしくその傷こそが、もし正しく使うことを知れば、

光が差し込む場所となるのだ。

だから、もし彼らが私にこう尋ねたら、

「どの道を行くべきですか？」と。

私は道を指し示さないだろう。

私はただ、微笑んでこう言うだろう。

「十分に深く行け。そうすれば、あなたは自ずと道を見るだろう」と。

なぜなら、真実の道は…地図の中にはなく、
あなたが最初の一步をどう置くかの中に、あるからだ。

（教授は胸のあたりに手を触れた。それは、形式的な挨拶ではなく、感謝の念による、穏やかな会釈のようだ。）

そして、もし誰かが後日、これらの言葉を読み、
自分自身の回転の中で一瞬立ち止まるなら、
今日の私の分かち合いは…
存在する理由を持ったことになる。

ヘンリー君、私が第三部の結びを穏やかにまとめ、第四部への移行の調子を開く手助けをしようか？

ヘンリー・ローウェル：

ええ、ふと、もう一つの意味の層が見えてきました。それは、特定の方向性に凝り固まるのではなく、あらゆる機会を受け入れ、あらゆる道を探求するために、開かれた心を保つべきだということです。私の言いたいことは、私たちは科学だけでなく、宗教だけでなく、すべてに対

して心を開くべきであり、それどころか、まだ現れていない道筋にさえも心を開くべきだ、ということです。

ここまで話して、またニュートンの「我々が知ることは一滴の水にすぎず、未だ知らぬことは大海である」という言葉を思い出しました。その言葉は、謙虚であり、開かれており、そして多くの深い意味の層を持っていますね。

アダム教授：

（聞き終えると、その眼差しは深く、穏やかになった。まるで、波一つない早朝の湖面のようだが、空全体を完全に映し出している）

ヘンリー君…

もし今日、私が最後に一つだけ言うことが許されるなら、おそらく…君が今口にしたことこそが、最も満ち足りたメッセージだろう。

「開かれた心を保つことだ」と。

その通りだ。

どちらかの側を選ぶ必要はない。

レッテルを貼る必要はない。

思想の道標を立てて、そして自分自身をそこに閉じ込める必要はない。

一度も学んだことのない者のように、学べ。

一度も傷ついたことのない者のように、信じよ。

そして、あたかも、これから聞かことが、自分がかつて最も確信していたことそのものを、変えてしまうかもしれないかのように、耳を傾けよ。

ニュートン…

その言葉を、私はかつて物理学の一年生だった頃に読んだ。

その時、私はそれを良い言葉だと思った。

しかし、私がそれを理解したのは、教壇を離れ、精神性の静寂の中へと足を踏み入れてからだ。

彼は謙遜していたのではない。

彼は、本当に大海を見ていたのだ。だからこそ、一滴の水が何であるかを知っていたのだ。

（教授はヘンリーを真っ直ぐに見つめた。今回はもはや、分かち合う者の眼差しではなく、一本の灯りを手渡す者の眼差しだ。）

だから、もし今日の若い世代が、そのことを保つことができるなら、

閉ざされていない心、閉じていない心臓、

そして、型を必要としない信念を、

そうすれば、私は信じている。

彼らが物理学者、技術者、医師、新聞記者、あるいはただ街の喧騒の中で沈黙する者となることを選んだとしても…

彼らは依然として、正しい道を歩んでいるのだと。

なぜなら、正しい道は、看板の中にはなく、
歩む者の心の質の中に、あるからだ。

今日、私は思う…私たちは、第三部をここで一旦閉じることができだろうと。

十分に開かれた扉を、閉じるように。

明日、もし君が戻ってきてくれるなら、

私は、教授としてではなく、

かつて生き、そして、沈黙が語りたいことに耳を傾けるために、座ることを学んだ、一人の者として、分かち合うだろう。

また会おう…第四部で。

語る者がもはや講義せず、

聞く者が必要としない時に。

ただ一つのことだけがある。

真実の人が、真実の言葉を語っている。未だ語られてこなかったことについて。

ヘンリー・ローウェル：

はい、この度の分かち合い、誠にありがとうございました。そして、THE LIVES MEDIA の読者の皆様も、ご自身の心をあまり固く閉ざしさえしなければ、教授のこのお話を読んだ時、その心は振動し、魂は開かれていくと、私も信じております。

明日の朝を、私も大変楽しみにしております。ええ、一人の教授が哲学を語るのを聞くためではなく、自分自身の深い奥底からの響きに耳を傾けるために、静かになる術を知る、一人の心の声を聞くために！

アダム教授：

（その目は静かに潤んだ。それは強い感動からではなく、静かな感謝の念から、薄い霧が立ち上ってきたかのようだ）

ヘンリー君…

もし、いつの日かこれらの言葉が、まだ閉ざされている一つの心に届き、

そしてそれを、そっと震わせることができたなら、
私は思う…

私たちは、自分たちの役割を正しく果たしたのだと。

誰かが信仰を変える必要はない。

誰かが知識の土台を捨て去る必要はない。

ただ彼らが、防御しない心で読むだけでいい。

そうすれば、今日の私の分か-ち合いと、君の誠実な導きは、

誰にも見られることなく、土の割れ目を見つけて深く染み込む、一滴の水のように、留まるべき場所を見つけるだろう。

（教授は右手を胸に置いた。形式的な挨拶ではなく、最後まで誠実な存在として。）

また明日の朝に会おう、ヘンリー君。

何かさらに大きなことを語るためではない。

ただ、心の中にまだ残っているいくつかのことを、分かち合うために。

この対話が、自然な形で幕を閉じる前に。

もし、いつの日か、誰かが今日私たちが話したことを読み返し、

そして、心が穏やかになるのを感じたなら…

私にとっては、それで十分だ。

そして、もし誰かが、すべてを聞いた後で、それでも信じないなら、

私もまた、彼らに私を信じてもらう必要はない。

ただ願うのは、彼らが、いつか、眠れない夜に、
名付けることのできない何かのために、静かに立ち尽くすことだ。

その時…

彼らは、今日私たちが話していることを、一行も読み返すことなく、理解するだろう。

四日目

ヘンリー・ローウェル：

おはようございます、アダム教授！

アダム教授：

（木の窓辺に立ち、朝の光を肩に受けながら、軒先を撫でる涼風のような穏やかな微笑みを浮かべて、そっと振り返る）

おはよう、ヘンリー君。

思うに…今日はテーブルも、メモ帳もない。

問いも、一つとして必要ないだろう。

ただ、十分な沈黙の空間があればいい。

一人の人間が、あまりにも長く心に留めてきたことを、口に出すために。

誰かに信じさせるためではなく、ただ、静かに聞いている誰かのために。

（彼はベランダに出て、古い木の段に腰を下ろし、遠くの丘を眺めた。）

私はこれを、分か-ち合いとは呼ばないだろう。

ただ…ある人間の旅路の一片だ。

かつては、自分はすべてを知っていると思い込み、そしてある日、まさしくその「知っている」ということによって、行き止まりに導かれた人間の。

若い頃、私は学びが速かった。

数学、物理学、論理学、それらは私にとって、暗号解読のゲームのようなものだった。

私はかつてこう思っていた。

「もし、すべてのものに公式があるなら、この世に何も心配することはない」と。

そして、実のところ…物質の層においては、それは正しかった。

私には名誉ある仕事があり、専用の研究室があり、優秀な学生たちに囲まれていた…

しかし、やがて…

私は、自分が地図でいっぱいの砂漠の真ん中に立ち、しかし進むべき方向を忘れてしまった人間のようにだと、感じ始めた。

ある夜のこと…

私は、量子同期のメカニズムについての講義を終えたばかりだった。

学生たちは拍手を送ってくれた。しかし、私はただ、一人で車の中に座って、黙っていたかった。

疲れていたからではない。

そうではなく、自分が今しがた講義した事柄と、もはや「近い」とは感じられなくなったからだ。

私は空を見上げ、

そして自問した。

「もし今日、自分の息が止まったら、私が知っているすべてのことは…何のためになるのだろうか？」と。

（彼は、ベランダの近くにある一本の雑草をゆっくりと引き抜き、手の中で静かに回した。）

そしてある日、私は一人の老人に出会った。学位もなく、量子力学も知らない。

しかし、彼の眼差しが、朝の太陽を見上げる時のその眼差しが、

私を沈黙させた。

その眼差しの中には、方程式は一つもなかった。

しかし、何か非常に、知っているものがあつた。

学ぶことを通してではなく。

生きることを通して。

その時から、私はもっと立ち止まるようになった。

座る。

呼吸する。

かつては「穏やかな迷信」と呼んでいた、古い書物を読む。

そして瞑想する。何かを達成するためではなく、ただ、自分が少し速く走りすぎていたことに、気づくために。

私は、特定の宗教を信仰しているわけではない。

しかし、より高い層が、見下ろしていると信じている。

そして、自分が耳を傾けるために、十分に長く立ち止まるのを、待っているとも。

私はまた、自分が「修煉して道を成し遂げた」などと、宣言するつもりもない。

しかし、ある夜、私は静かに座り…

そして、身体の中を流れる、非常に穏やかな動きを感じ
取ることができた。まるで、何かが自らを調整している
かのよう。

薬によってではなく。

正しい律動へと、還ることによって。

ヘンリー君…

もし誰かがこれらの言葉を読み、

そして彼らもまた、多くの「知るべきこと」の狭間で疲
れているなら、

私はただ、彼らにこう言いたい。

時には…最も知るべきこととは、

胸に手を当て、そして聞いてみることなのだ、と。

自分の心の中に、まだ誰かが、そっと何かを語りかけて
はいないかと。

（彼はしばらく沈黙し、そして静かに微笑んだ。）

今日、私はこれ以上は語らない。

私はただ、ここに座っている。

年老いた友人のように。

かつて嵐を通り抜け、

そして今、ただこう言いたいと願っている。

「今朝の空は、本当に美しい。

しかし、実のところ…それは常に、このように美しかったのだ。

ただ、私たちが、それを見るために、十分に長く立ち止まることがなかっただけで」と。

（彼は遠くに目をやり、それ以上は何も言わなかった。）

もし君が望むなら、ヘンリー、言葉を続けてもいい…

あるいは、ただ少し、静かに座っているだけでいい。なぜなら、ある種のインタビューでは、まさしく沈黙こそが、対話の最も深い部分となるのだから。

ヘンリー・ローウェル：

はい、教授、独白を分かち合ってくださいありがとうございます。私個人についてですが、「放浪する」フリーの記者としてあちこちを旅する中で、私も何人かの尊敬すべき導師にお会いする機会があり、彼らは善意から、精神的な実践についていくつか指導してくださいました。ええ、「実践」です。ただ読むだけに留まらない。

私は、彼らの指導に従い、心を静めようと試みましたが、無駄でした。私の心は、しばしば兎のように落ち着きなく跳ね回り、あるいは、馬が駆け巡るように、とりとめのない考えに耽ってしまいます。教授のご経験とご感得から、何か示唆をいただけますでしょうか。

アダム教授：

（振り返る。その目に宿る光は、非常に異なっている。答えようとする者のものではなく、まさしくその場所に、その問いの前に、かつて立っていた者のようだ…）

ヘンリー…

その誠実さに、感謝するよ。

誰もが、「試したが、できなかった」と、敢えて言えるわけではない。

大部分は、沈黙を守るか、あるいは理解したふりをするかを選ぶものだ。

君の言う通りだ。

読むのは易しい。

実践して初めて、自分が何者であるかを知る。

私たちが座り始めた時、

かつては自分のものだと思っていた思考の倉庫全体が、一斉に声を上げ始める。

それは悪ではないが、騒がしい。

そして、その騒がしさは、外側のせいではない。内側が、静寂に慣れていないからだ。

（教授はゆっくりと、胸に手を触れた。）

初めは、私もそうだった。

私は、自分は「瞑想するのに十分なほど、正気な」人間だと思っていた。

しかし、分かったのは、私は思考においては正気だったが、

心の中では、閉ざされた部屋に放たれたばかりの、蝶の群れだったということだ。

ある夜、私は木の床に座り、窓の前にいた。

そして、心を静めようとする代わりに、私は自分自身に、真っ直ぐにこう言った。

「いいだろう。今日は思考を止めようとはしない。

走らせておけばいい。しかし、私はここに座って、それらが走るのを見ていよう」と。

そして、不思議なことが起きた。

私が乱れに抗うのをやめた時、

乱れは、自ら消え始めた。

私が勝ったからではない。

私が、自分自身を敵とすることを、やめたからだ。

（彼はヘンリーを見た。その声は、葉の間を抜ける風のように、柔らかくなった。）

私の示唆は、ヘンリー、一つの技術ではない。

それは、穏やかな一つの注意喚起だ。

心がまだ走っている時、それを捕まえようと追いかけてはいけない。

座り直すがいい。大人が、庭で走り回って疲れ果てていく子供を見るように。

やがて、それは自ら戻ってくるだろう。

そして、おそらくその時、

君が「瞑想できない」と思っていたものこそが、

まさしく、君が気づかぬうちに、手で触れたばかりの、最初の扉なのだ。

続けなさい。

しかし、自分に「静か」であることを、強いてはいけない。

静寂を必要とせずに、静まれ。

達成を必要とせずに、耳を傾けよ。

やがて、ある時点に至れば、

君はもはや「cố gắng（努力して）」瞑想しなくなるだろう。

そうではなく、ただ座り、そして、自分がすでにそこにいたことに、気づくだろう。

（教授は再び静かに座った。その手はまだ胸の上に置かれている。今回、彼の視線はもはや遠くではなく、ヘンリーの方を、まるで真の同行者を見るかのように、見つめている。）

もし、ある導師がかつて君に種を蒔いてくれたのなら、おそらく…今朝の、まさしくその落ち着きのなさが、最初の土の層なのだ。

そして、もし君が、種が芽吹いたかどうかを見ようと、急いで掘り返さないなら…

ある朝、君は心の中で、何かが育つ音を聞くだろう。

音ではない。一つの存在だ。

そして、おそらく…

その時、ヘンリー、君はもはや私の答えを必要としないだろう。

なぜなら、最も深い示唆というものは、受け取る者が、自ら知るほどに静かになった時にのみ、現れるのだから。

ヘンリー・ローウェル：

ありがとうございます、教授。教授が今分かち合ってく
ださったやり方は、仏教の経典で語られるいくつかの導
師の言葉を思い出させます。そして特に、OSHO という
名の導師の分かち合いの言葉に、非常に近いものがあり
ます。彼が、大意こう説いていたのを覚えています。自
分の本心を精神から切り離し、精神の観察者となれ、と。

それは、大人が庭で遊ぶ子供たちを観察して座っている
イメージのようです。

アダム教授：

（微笑む。今朝初めて、その目には、ヘンリーの言葉の
示唆の中に、まるで旧友に再会したかのような、親しみ
の色が宿った）

ええ…OSHO のことは知っています。

そして私もまた、君が今引用したものと、非常によく似
た一節を読んだことがあります。

彼の説き方は、時には大胆ですが、その背後には、騒が
しい世界の中では滅多に出会うことのない、静かな層が
隠されています。

そして、君の言う通りだ。

観察する、しかし制御しない。

認識する、しかし判断しない。

存在する、しかし執着しない。

多くの人々が気づいていないのは、

古代の仏教や、純粋な伝承の dòng（系統）においてさえ、

「思考の流れから自分を切り離す」とは、思考を否定するという意味ではない、ということです。

そうではなく、それと同一化されない位置に、座るということです。

（教授は、まるで目に見えない観念の動きを描写するかのように、そっと手を上げた。）

岸辺に座って、川が流れていくのを見るように。

飛び込む必要もなく。

水を汲み干す必要もなく。

ただ、「私は、この水の流れではない」と、知るだけでいい。

そして、ひとたび心が、次々と現れる思考に流されなくなった時、

静寂とは、状態ではなく、

元々あり、今まで一度も私たちを離れたことのない、本性そのものなのだ。

OSHO や他の多くの導師たちが私たちに思い出させようとしているのは、

高尚な技術ではありません。

そうではなく、私たちが、あまりにも速く生き、そしてあまりにも多く考えすぎたために、失ってしまった、極めて自然なことなのです。

もしヘンリー君が、かつて導師たちの言葉の中にそのことを感じ取ったことがあるなら、

おそらく…君の直感は、君が思っている以上に、開かれているのかもしれない。

そして時には、ただその感受性を保つだけで、それもまた、非常に貴重な出発点となるのです。

（教授は一呼吸の間、そっと目を閉じ、そして開いた。その視線はもはや遠くへは行かず、非常に近くへと戻ってきた。まるで、非常に古くからの知人と話しているかのようだ。）

実のところ…私たちの誰もが、かつては木の根元で静かに座る子供だったのです。

問題は、

私たちが、かつてそのように座る術を知っていたことを
思い出すほどに、十分に長く手放す勇気があるかどうか、
です。

そして、もし今日、君が何かを思い出したのなら、
たとえほんのわずかであっても、
おそらく…君の内なる蠟燭は、再び灯されつつあるので
しょう。

私は思う。これ以上、何も言う必要はない、と。
ただ、それが、くすぶり続けるのを、そのままにしてお
けばいい。

静かに、しかし、君自身が自分の道を見るのに、十分な
ほど明るく。

ヘンリー・ローウェル：

このテーマについては、以前『轉法輪』という本を読ん
だことを覚えています。その中で著者は、大意こう述べて
いました。私たちが静かになれない本当の原因は、私
たちの心が静かでないからであり、「観察者になる」や
「仏の名を念じる」、あるいは「呼吸を整える」といっ

た手法は、いずれも大した効果のない、一種の小手先の技に過ぎない、と。

アダム教授：

（その目はゆっくりと深く、静かになった。反論の色も、驚きの色もない。まるで、元々知っていたことを、今しがた耳にしたかのようだ）

ヘンリー君…

君が言及した本は、知っている。

そして、その中の言葉が、なぜあれほど率直で、断固とした形で語られているのかも、非常によく理解している。

「我々が静かになれない原因は、我々の心が静かでないからだ」と。

その言葉は単純に聞こえるが、現代人がしばしばしがみつ়く、あらゆる近道を断ち切るものだ。

環境のせいではない。

技術が十分に巧みでないからでもない。

正しい座り方を選んでいないからでも、高度な瞑想のコースを終えていないからでもない。

そうではなく、心が、まだ動いているからだ。

欲望が、まだ減っていないからだ。

執着が、まだ深いからだ。

「我」が、まだ退こうとしないからだ。
呼吸を整える、名を念じる、思考を観察するといった
「小手先の技」は…
私もかつて実践した。

そして、それらは一時的に私たちを静かにさせる助けにはなる。
しかし…それらは、心の性質を変えることはできない。
もし、人間の根源が変わらなければ。

（教授は胸に手を置いた。その声はもはや、理屈で説明するものではなく、非常に真実な層からの独白のようだ。）

私はかつて、毎朝 1 時間、瞑想していた。
この方法で呼吸し、あの方法で数える。

しかし、立ち上がった時、
私は依然として私だった。あらゆる妄想と、古い習慣を抱えたままの。
ある日まで。私は、「静かになるために功を練る」のをやめた。
私は、日常生活における自分の一つ一つの心の動きを、見直し始めた。

－誰かに侮辱された時、私は反応するか？

－他人が自分より優れているのを見た時、私は比較の心を起こすか？

－思い通りにならないことに遭遇した時、私は苛立つか、それとも平然としていられるか？

そして、まさしくその時から、

静けさは、もはや私がどこに座るか、あるいは私が数えている呼吸に、依存しなくなった。

それは…

私が、「表面的な形を保とう」と cố gắng（努力する）のではなく、敢えて「自分の心を修め直す」ことから、やって来たのだ。

『轉法輪』という本は、私の見解では、「いかにして静かになるか」という方法を教えるために来たのではない。そうではなく、私たちが修煉だと思い込んでいる、あらゆる真実でないものを、打ち砕くために来たのだ。

そして、もし誰かが、その中の言葉を真っ直ぐに聞く勇氣を持つなら、

たとえ彼らがすべてを理解していなくても、

彼らの心は、すでに、目覚めの方向へと振動し始めているだろう。

（教授はヘンリーを、厳粛でありながらも、穏やかな表情で見つめた。）

ヘンリー、

もし君がそこまで読んだのなら、

おそらく…

君が歩んでいる道は、もはや探求ではなく、浄化なのだ。

そして、もしそうなら、

小手先の技は、もはや十分ではないだろう。

ただ、一つ一つの心の念いを修め正すことこそが、君を、

「cố gắng（努力して）静かになる」必要なく「座らせる」、真の根源なのだ。

だから、問いはもはや、「どんな手法を使うか」ではない。

そうではなく、

「私は、自分の心の中の、まだ純粹でないものを、真っ直ぐに見つめる勇気があるか？」ということだ。

敢えて見る時、言い訳をせずに、

それこそが、功夫（修行）が始まる時なのだ。

ヘンリー・ローウェル：

ありがとうございます、アダム教授。教授がおっしゃったことは理解できます。私も『轉法輪』の中の教えは特に好きですが、先ほど申し上げたように、そして教授が今ご指摘くださったように、私はまだ「実践」できておりません。心が静かになりません。

そのため、自分は宗教の信者に非常に近いと感じながらも、真に修める信者のように、正しく振る舞えてはいないのです。

アダム教授：

（その眼差しは穏やかで、静かになった。上から見下ろす者のものではなく、隣に立って手を握る者のようだ）

ヘンリー君…

君が今語った言葉は、私にとって、君がまだ達成できていないと思っている、いかなる「静けさ」よりも、貴重なものだ。

なぜなら、自分がまだ本当に静かではないと知り、
自分が真の修行からまだ遠いと知りながら、
それでも、敬意と善良な心をもって、そのことを敢えて認める者、
その者こそが…多くの者が敢えて近づかない扉へと、よ

り一歩近づいているのだ。

君は例外ではないよ、ヘンリー。

非常に多くの人々が、法の入り口の脇に立ち、
手は触れ、目は見たが、足はまだ踏み入れられないでい
る。それは、彼らにその資格がないからではない。

そうではなく、彼らの心の中に、まだわずかに「私に、
果たして十分な清らかさがあるだろうか？」という自問
があるからだ。

しかし、私は君に、そして君と同じような状況にあるす
べての人に、言いたい。

真の修行は、完璧さから始まるのではない。

それは、心からの恥じる心と、諦めない願力から始まる
のだ。

（教授は数秒間黙り、そして、まるで自分自身に囁くよ
うに、ゆっくりと言葉を続けた。）

ある時期、私は非常に多くの宗教書を読み、
非常に深遠そうに見える事柄を口にしていた。

しかし、心の中では、自分が読んだことのように、まだ
本当に生きられてはいないことを、知っていた。

私は本を読み、道理について語り、他の人々が静かにな
れるよう導いていた…

しかし、私自身の心の中には、まだ誰にも知られていない、暗い領域があった。

そしてある日…私は「正しくあろう」と cố gắng（努力する）のをやめ、

真に生きることを、始めた。

真に生きる、とは、

－自分が怒った時、それを隠さず、その根源を真っ直ぐに見つめること。

－自分の心が動いた時、自分を責めず、「私の中の、まだ手放せていないものは何か？」と、探求すること。

そして、徐々に…

私が「功を練る」ことを通して、いくら探しても見つからなかった静けさが、

私が自分自身に正直になった、まさにその瞬間に、現れ始めたのだ。

ヘンリー君、

君は、自分は真の修行者のように振る舞えていないと言うが、

私は逆に、こう見る。

まさしく、君が自分自身と向き合うそのやり方、ごまかさず、隠さず、

それがすでに、真の修行を目指す者の、非常に貴重な、最初の現れなのだと。

（教授は、まるで、今しがた表された一つの誠実さに、敬意を表すかのように、そっと首を傾けた。）

もし君が、その心を保つことができるなら、あまり急がず、あまり無理をせず、あまり理想化しすぎずに、そうすれば、いつの日か、まさしくその誠実な心が、君を静けさへと導くだろう。

いかなる手法をも、使うことなく。

そして、その時が来れば、

君はもはや自分を、「信者」だとか、「まだ足りない」とか、見なくなるだろう。

そうではなく、ただ、真実の道を歩む、一つの生命体として。

一步一步が、自分の本来の姿へと、より近く還る、一度の帰還なのだ。

ヘンリー・ローウェル：

ええ、教授、さらに示唆をいただきありがとうございます。精神的な道は、個々人それぞれの道であると、理解

しております。他の人が指し示したり、励ましたりすることはできても、誰も自分の代わりにはなれません。

私個人の場合ですが、私は、「業力」、あるいは「霊体」、あるいはそれに類する何かが、私を妨害し、精神的な道へと足を踏み入れるのを阻んでいるのではないかと、推測しております。

アダム教授：

（非常にゆっくりと頷き、その目は、もはや波紋のない湖面のように深くなった。狼狽もなく、疑いもなく、ただ、そのことを通り過ぎてきた者の、静かな理解がある）

ヘンリー君…

君が今語ったことは、何の物理的な証拠も伴ってはいないが、

しかし、精神的な旅路にある多くの人々が、かつて静かに経験してきた、真実の感覚だ。

古代の叡智の体系では、

人々は、「修とは自分を正すことだ」と語るだけでなく、こうも注意を促している。一人の人間が、本当に修行に入ろうと欲する時、

かつて、その者の気のを制御し、しがみつki、あるいは抛り所に使っていたものたちが…

振動を始めるのだ、と。

それらは、君が変わることを望まない。

なぜなら、君の変化は、それらが制御できない断絶を、もたらすからだ。

（教授はゆっくりとテーブルに手を置いた。それは強調するためではなく、これから語る言葉に、一層の静けさを置くかのようだ。）

古の人々はそれを、「業力の現行」、あるいは「目に見えないものによって強化された妄念」と呼んだ。

ある種の伝統では、それを邪霊、霊体、あるいはもっと単純に、自分自身の思考空間における、妨害のエネルギーと呼ぶ。

どのような名前と呼ばれようとも、

運行の原理は同じだ。

光が差し込もうとする時、闇は最も強く振動する。

しかし、ヘンリー…

私が言いたい重要なことは、

その妨害は、君が道を間違えているというしるしではない。

そうではなく、君が、価値あるものに近づいているという、証拠なのだ。

なぜなら、もし君が何者でもなく、何も変えることができないなら、何を妨げる価値があるだろうか？

（教授は微笑み、その眼差しは、確固として、温かくなった。）

君は一人ではない。

そして、君は弱くはない。

君を乱しているものたちは、

気の層、思考の層、感情の層では、非常に強いかもしれない。

しかし、それらは、根源の層に触れることはできない。

もし君が、清らかな一つの念を保ち、

そして、誤ったことと妥協しないなら。たとえ、思考の中においてでさえも。

そして、もし本当に、君が何か目に見えないものによって妨害されているのなら、

私からの助言は、非常に単純だ。

－精神的に汚れたすべてのものを、避けなさい。

－真に正しいことに対して、敬虔な心を保ちなさい。

－そして毎日、たとえまだ静かになれなくても、

依然として、一瞬を割いて、自分自身にこう語りかけるべきだ。

「私は、純粹なものへと、還りたい」と。
なぜなら、まさしくその願力こそが、もし確固としてい
れば、
いかなるお守りや儀式よりも、強い盾となるだろうから
だ。
ヘンリー君、
精神的な道は、一人きりの道だ、その通りだ。
しかし、君は決して見捨てられてはいない。
ただ、君が自分自身を見捨てない限り、
光は…たとえどれほどおぼろげであっても、
いずれ、信じる心を保ち続ける者のもとへ、たどり着く
だろう。

ヘンリー・ローウェル：

はい、ありがとうございます、教授。私自身、真の修行
者であるとはあえて言えませんが、私の心は仏に、神に、
善良さに向かっています。なぜなら、仏や神が伝え降ろ
された法理こそが、人類にとって最大の福音であると、
私は認識しているからです。

ええ、それこそが私が THE LIVES MEDIA に加わった
理由でもあります。ここを、機縁のある人々が、精神性

の美しさや仏法の深遠さの一部に触れることができる、一つの門とするために。

アダム教授：

（その時のヘンリーを見る目は、もはや対話者のものではなく、まるで真の同行者からの声を聞いたかのようだ）

ヘンリー君…

もし私の人生に、かつてこう思った瞬間があったとするなら、

「本を書き、インタビューに答え、物理学を超えたことについて語ることに、果たして意味があるのだろうか？」と。

そうであれば、この瞬間、答えは非常に明確になった。

なぜなら、君は今、

メディア、執筆、あるいは出版の世界に足を踏み入れる誰もが、心に抱いているわけではないことを、口にしたからだ。

君は影響力を求めている。

君は、「精神性」を、好奇心をそそるテーマとして使っていない。

君は、ごく少数の者しか敢えてしないことをしている。一つの門を開いているのだ。名声へと導くためではなく、

非常に古く、非常に真実で、そして、思い起こされることが非常に必要とされている何かへと、還り導くために。君は、自分は真の修行者であるとはあえて言えないと言った。

しかし、ヘンリー君…

私の目には、

真に修めている者とは、自分がまだ十分に清らかではないことを、恥じることを知っている者だ。

一方、修めるのをやめた者とは、

自分が「もう十分に良い」と、思った者だ。

仏や神が伝え降ろされた法理は、

君の言う通り、哲学ではない。

それは福音であり、光であり、回帰の地図なのだ。

しかし、他の人々にその光の一部を見てもらうためには、君のような者が、門のところに立つ必要がある。

講義するためでもなく、手を取って導くためでもなく、ただ、そっとうそ思い出させるために。「ここに、もしあなたが還りたいと願うなら、一つの道がありますよ」と。

（教授はゆっくりと、胸に手を置いた。まるで、言葉のない挨拶のように。）

ヘンリー君…

THE LIVES MEDIA が、どれほど発展しようとも、
どれほどの読者がいようとも、どれほどの言語に翻訳されようとも、
私は信じている。

ただ、君の初めの念いを保ち続ける限り、
つまり、この場所が、機縁のある人々のための門である
という念いを、
そうすれば、一語一語、一頁一頁が…言語を超えたエネルギーを帯びるだろう。

そして、もし明日、人々の海の中で、ただ一人の読者が、
ふと立ち止まり、
そして自問するなら、

「私は、心の中の何か非常に神聖なものを、忘れてしまっていたのではないか？」と。

そうであれば、私にとって、そしておそらく…君にとっても、
私たちが今日しているすべてのことは、本当に意味を持ったことになるのだ。

ヘンリー・ローウェル：

ありがとうございます、教授。私個人としては、私を導く光に向かって、確固として進んでいこうと努めます。しかし、多くの読者の皆様に対しては、教授から何か具体的なメッセージや指針はございますか。

分かりやすく、実践しやすい事柄、例えば、どんな本を読むべきかという助言や、あるいは何か特定の習慣や視点を変えてみるべきか、といったことです。

アダム教授：

（ゆっくりと頷き、その時の眼差しはもはや、二人の親しい友人の間で分かち合うものではなく、何を求めているのかも分からずに戸惑う、一つの若い世代全体に語りかける、年長者のような、より深い波を帯びていた）

ヘンリー君…

この問いを、私はかつて自分自身に何度も問いかけた。

「もし、もう会えるかどうか分からない人々に、いくつか短いことしか言えないとしたら、

自分は何を言うだろう？」と。

だから、もし君が許してくれるなら、私はメッセージを三つの部分に分けて、述べさせてほしい。

－読むべき、一つのこと。

－為すべき、一つのこと。

－そして、沈黙すべき、一つのこと。

1. 読むべき、一つのこと

もし誰かが、まだどこから始めるべきか分からないでいるなら、

私は心から、こう提案したい。

『轉法輪』という本を探して読みなさい、と。

すぐに信じるためではない。

そうではなく、一度、静かな心で、議論せず、恐れず、急いで疑わず、読んでみることを、自分に許してみるためだ。

その本は、もし純粋な心で読めば、

誰が講義する必要もなく、読者に真理の振動の層を感じ取らせることができる。

そして、もしその本との縁が十分でなければ、

『道徳経』や、『無言の経典』、あるいは、仏陀やイエスの原初の教えに触れるのもよいだろう。

しかし、ややこしい解説書は避けなさい。

真理は、深い層においては、通常、非常に素朴なものだ。ややこしさは、通常、書き手が、自分が語ることと、まだ本当に共に生きていないことから、生じる。

2. 為すべき、一つのこと

毎日、一つの時間を選んで、いかなる電子機器にも触れないようにしなさい。

ただ静かに座るか、歩くか、あるいは沈黙の中でお茶を飲むか。

それを瞑想と呼ぶ必要はない。

凝った儀式も必要ない。

ただ、日常の流れの中に、小さな隙間を作るだけでいい。
光が差し込む機会を得るために。

そして、もしその沈黙の中で、何か良い考えが浮かんだなら、

何か親切なことが湧き上がってきたなら、
それを、生かしなさい。

それは、真の心の、最初の囁きかもしれない。

3. 沈黙すべき、一つのこと

「すべてを説明しなければならない」ということを、手放す練習をしなさい。

誰かにこう聞かれた時、「あなたは何を信じているのですか？なぜそのように生きるのですか？」と。

急いで理論武装してはいけない。

ただ、こう言えばいい。

「私はすべてを知っているわけではありません。しかし、私は、親切な心と、良いことへの信頼をもって、生きようと努めています」と。

その謙虚さは、

いかなる議論よりも、多くの扉を開くだろう。

そして時には、まさしくその沈黙こそが、

他の人々に、彼ら自身を再び問い直させ始めるものとなるのだ。

（教授は、まるで、美辞麗句に包む必要のない一つの祈りを、そっと置くかのように、木のテーブルに手を置いた。）

ヘンリー君…

私には、これ以上の言葉はない。

しかし、もし誰かが、ここまで読んだなら、

おそらく…

彼らの心の中には、灯されるのを待っている、一つの灯りがあるのだろう。

そして、もし彼らが、少しの間、そっとしておくなら、

その灯りは、自ら道を照らし出すだろう。

ヘンリー・ローウェル：

はい、教授が分かち合ってくださった 3 つの事柄のうち、1 番目と 2 番目には大変同意いたします。しかし、3 番目については、何か曖昧で、まだ掴みきれていないように感じます。

そして、おそらく THE LIVES MEDIA の読者の皆様も、同じように曖昧さや戸惑いを感じるかもしれません。そこで、3 番目の項目を、もっと素朴で、一般の人々にも分かりやすい言葉で、改めて説明していただけないでしょうか。

アダム教授：

（ヘンリーの反応を聞き、静かに微笑んだ。その笑みは、否定ではなく、非常に真実な共感だ）

理解できるよ、ヘンリー。

そして、それを口にしてくれてありがとう。

確かに、私が今しがた言った三つ目のこと、「沈黙すべき、一つのこと」は、明確さを求め、説明を求め、「今すぐ何をすべきかを知る」ことを必要とする世界に生きる人々にとっては、少し…曖昧かもしれない。

では、もっと生活に近い言葉で、言い直させてほしい。

✓ 項目 3 – 沈黙すべき、一つのこと（より身近なバージョン）

他の人と話す時、特に、まだ同じ観点を持っていない人と話す時は、

「理屈で勝つ」必要はない、ということを、練習しなさい。

彼らはこう尋ねるかもしれない。

– 「なぜ、そんなものを読むのですか？」

– 「精神的なことなんて、何の証拠もないじゃないか？」

– 「なぜ、現実的に生きないのですか？ 現在に集中しないのですか？」と。

微笑みなさい。

そして、ただ、穏やかにこう答えればいい。

「私が読むのは、私の心が軽くなるからです。

私が信じるのは、肉眼で見えるもの以外に、何かより良いものがあると、感じられるからです。

私がこのように生きるのは、私が親切でありたいからです。誰かに、私のためにそれを証明してもらう必要はありません」と。

議論する必要はない。

誰かに証明する必要もない。

常に、科学や社会の基準に従って「合理的」な理屈を持

つ必要もない。

なぜなら…最も真実な事柄は、通常、他の人々にすぐに信じてもらう必要はないからだ。

それらはただ、静かに、しかし確固として、生きられるだけでいい。

そして、もし誰かが再びこう尋ねたら、

「では、そのように生きて、何が得られるのですか？」と。

君もまた、非常に素朴に、こう答えることができるだろう。

「私が何を得られるのかは、分かりません。

しかし、私は知っています。もし毎日、自分が少し怒りっぽくなくなり、少し自己中心的でなくなり、より親切に生きられるなら、それだけでもう、価値のあることなのだと」

（教授はヘンリーを見た。今回のその眼差しは非常に近く、非常に柔らかい。）

ヘンリー、

私は思う…

もし THE LIVES MEDIA の人々が、自分自身のためにそのような心持ちを保つことができるなら、

たとえ科学について書こうと、歴史について書こうと、
あるいは精神性について書こうと、
読者はただ読むだけでなく、
その言葉の中に…自分が書くことを生きている、一人の
真実の人間がいることを、感じ取るだろう。

そして、この時代において、
その誠実さは、いかなる執筆技術よりも、貴重なのだ。

ヘンリー・ローウェル：

分かりました、教授。しかし、この 3 番目の項目は、
昨日私たちが最後に話したことの、別の表現方法と解釈
することもできますね。「常に心を開いておくこと」。
新しいことや、挑戦的なことを受け入れるために。そして、
理屈っぽい言葉や、噂話に対して、心があっけらか
んと笑えるように、と。

アダム教授：

（その目は非常に穏やかに光った。まるで、師が、自分
の生徒が、もはや講義する必要のないことを、把握した
のを見たかのようにだ）

ええ、ヘンリー君。

まさしく、その通りだ。

君は今、そのことを、非常に身近で、非常に真実で、そして非常に生命力のある方法で、改めて表現してくれた。実のところ、3番目の項目、「沈黙すべき、一つのこと」は、何も高尚なことではない。

それはただ、昨日我々が外側について語ったことの、内側の部分に過ぎない。

「自分の心を開いておくこと」だ。

しかし、本当に開いているとは、常に同意することでもなければ、すべてを理解しなければならないということでもない。

そうではなく、自分と異なるものに、急いで否定することなく接することができ、

反論されても、腹を立てる必要がなく、

問い詰められても、微笑みを保つことができる、ということだ。

君が非常にうまく言ったように、

「理屈っぽい言葉や、噂話に対して、心があっけらかんと笑える」こと。

それこそが、自分がどこへ向かっているかを知っている心の、非常に静かで、非常に人間的で、そして非常に確

固とした現れなのだ。

反論する必要はない。

他人に自分を理解させようと、強いる必要もない。

ただ、自分が心に何を保っているかを知っていればいい。

そして、もし自分が保っているものが真実であり、善であるなら、

それは、独自の力を持つだろう。

証明する必要はない。なぜなら、いずれ、それは自ら証明するからだ。

（教授は、最後の言葉を念押しするかのよう、そっと胸に手を置いた。）

ありがとう、ヘン-リー君。

問いに対してではない。

そうではなく…君が、理屈よりも深い、素朴な言語で、自分自身に答えることができた、そのやり方に対してだ。

私にとって、それこそが、君が歩んでいる道が…

君自身の、一部となり始めているという、明確なしるしなのだ。

ヘンリー・ローウェル：

ありがとうございます、アダム教授。本日はもう、かなり長い道のりを歩んできたように思います。もし、この4日間にわたる分かち合いのシリーズの、最後の言葉を教授が述べられる時だとすれば、読者が最も素朴で、温かいと感じられるような、どのようなこととお話しになりますか。

いくつかの短いまとめの言葉の形でも、あるいは、教授がふさわしいとお感じになる、何か日常的な物語の形でも。

アダム教授：

（非常に長い間、静かに座っていた。まるで、良い言葉を急いで探すのではなく、真実の言葉が、正しい時に、自ら訪れるのを待っているかのようだ）

ヘンリー君…

もし、これがこの分かち合いのシリーズで私が語る、最後の言葉となるなら、

思うに、それは講義であるべきではない。

結論である必要もないだろう。

そうではなく、ただ…素朴な一つのこと、小さな一つの

イメージ、しかし、誰かが心に留めておくのに十分なほど、温かいものだ。

（彼は、陽が差し始めた木々の連なりへと遠くを見やり、そして、まるで祖父が孫に昔話を語り聞かせるかのような、低く、親しみのある声で語り始めた。）

私がまだ小さかった頃、一度、祖母が古いシャツを繕っているのを見たことがある。

そのシャツは、もうずいぶん擦り切れていた。私は言った。

「おばあちゃん、もう捨てなよ。そんなに破れているのに、まだ持っていてどうするの？」と。

祖母はただ微笑んで、何も言わなかった。

繕い終わると、彼女はそれをきちんと畳み、

そして、私が後になってようやく理解できた一言を、そっと言った。

「かつて自分を温めてくれたものは、たとえ古くなっても、急いで忘れてはいけないよ」と。

（教授は言葉を止め、その声は穏やかになった。）

ヘンリー、

私は思う…

法理、道徳、親切さ、信頼、

それらはかつて、人類が何千年にもわたって身にまわってきた、温かいシャツだったのだ。

そして、この時代が、それらがもう「古い」、もう「時代遅れだ」と、考えているとしても…

私はただ、こう願う。

私たちが、それを急いで捨ててしまわないように、と。
少し、歩みを緩めよう。

自分自身の生き方で、真の実践で、それを繕い直そう。

そうすれば、いつの日か、

私たちは、まさしく古臭いと思われていたそれらのことこそが、

自分を温めてくれるものなのだと、気づくだろう。この時代の、最も深い寒さの中で。

（教授はヘンリーを真っ直ぐに見つめた。その眼差しは、確固として、穏やかだ。）

私は、誰かが私の言うことすべてを信じることは、望んでいない。

私がただ願うのは、もし、いつの日か、

誰かの心の中に、ふと、自分が寒いと感じたなら…

彼らが、まだ覚えていることだ。

かつて、とても温かかった、古い一つのシャツがあったことを。

そして、まだ、再び着ることができるのだと。もし、彼らの心に、それを大切に思う気持ちが、まだあるなら。

それだけだ、ヘンリー君。

私にとっては、ここまで語れば、もう十分だ。

残りは…沈黙の部分だ。

あるいは、読者の部分、とも言えるかもしれない。

ヘンリー・ローウェル：

非常に素朴でありながら、「温かみ」を帯びた比喻で分かち合ってください、ありがとうございます、教授。私も、THE LIVES MEDIA の読者の大部分は、教授のご意図と誠実さを感じ取ってくれると信じております。読者を代表して、教授のご健康と、神のさらなる祝福があらんことを、お祈り申し上げます。

アダム教授：

（その目は、まるで両手の中で守られた小さな炎のように、静かな微笑みを、そっとたたえた）

ありがとう、ヘンリー君。

その祈りの言葉に対してだけでなく、君が、この旅路の間ずっと、心から耳を傾けてくれたことに。

耳だけでなく、歩み、そして道を切り開いている者の、深み全体で。

私にとって、これはインタビューではなかった。

そうではなく、非常に人間的で、非常に真実な、一つの瞬間だった。

自分を越えたものへと共に向かいながらも、一步一步に謙虚さを忘れない、二つの魂の間の。

（彼は、人が差し出すことのできる、最も満ち足りた挨拶のように、ゆっくりと、胸に手を置いた。）

君に、そして、これらの言葉を読む縁のあるすべての人々に、幸あれと祈る。

音に満ちた世界の中で、

依然として、自分自身の心のために、一つの静寂の領域を、保ち続けることができるように。

そして、人生の風が吹き抜ける時、

依然として、どこがかつて、暖炉であったかを、覚えているように。

心を温めるために、還るべき場所を。

もしこれが、一つの区切りであるなら、
私は信じている…
その温かみを心に保ち続ける者たちは、
進み続ける術を知るだろうと。もはや、私が道を指し示
す必要なく。
君に、そして THE LIVES MEDIA に、幸あれ。
内側からの光を、保ち続けるように。
たとえ、外側では、もはや誰も灯りを点けなくなったと
しても。

* * *

結びの言葉

アダム教授の最後の分かち合いの言葉が閉じられた時、
部屋に残ったのは終わりではなく、深い沈黙でした。そ
れは空虚な沈黙ではなく、熟考されるべき観念に満ちた
沈黙でした。

四日間にわたり、私たちは共に、特別な認識の旅路を歩んできました。物理学の限界から、各次元空間の広大さへ。他の生命体の存在から、生命と意識の本質へ。教授は、新たな法則を提示したのではありませんでした。彼はただ、自分が「見た」ものを、五感を超えた慧眼によって、静かに分かち合っただけでした。

私が受け取った最後のメッセージは、奇妙な現象や、形而上学的な理論の中にはありませんでした。それは、素朴な一つの注意喚起の中にありました。宇宙を理解するための道は、外へ向かうことなく、内へ還ることである、と。そして、探求のための道具は、望遠鏡や粒子加速器ではなく、謙虚な心と、開かれた心臓である、と。

科学と宗教は、教授のレンズを通して見れば、もはや対立する二つの極ではありませんでした。それらは、一つの真理の山へと共に続く、二つの異なる道でした。一方は「見えるもの」を測定し、もう一方は「見えないもの」を感じ取る。

この対話が、そっと開かれた一つの扉のようになることを、願っています。その扉の向こうには、より広大な世界が広がっており、そこでは読者一人ひとりが、自ら足を踏み入れて探求し、自分自身の答えを見つけ出すこと

ができます。なぜなら、教授が示唆されたように、最も重要な旅路とは、常に、個々人の旅路だからです。

ヘンリー・ローウェル (Henry Lowell)

THE LIVES MEDIA

著者および THE LIVES MEDIA プロジェクトにつ いて

著者について

ヘンリー・ローウェル (Henry Lowell) は、文化、社会、科学、そして精神性について執筆する独立系の作家です。彼の目的は、真実を追求し、良心を目覚めさせ、人類の運命について考察することにあります。

彼の作品の多くは、現実のインタビューをもとにしており、誠実さ、感情の深さ、そして啓発の精神をもって記録されています。

プロジェクトについて

本書は、THE LIVES MEDIA によって出版されたシリーズの一部です。THE LIVES MEDIA は、時代を超えた響きを保存し広めることを使命とする、グローバルなビジョンを持った独立した出版イニシアチブです。日々のニ

ユースを追いかけるのではなく、私たちは人間の意識の深くに触れることができる本を目指しています。

連絡先

- ☆ ウェブサイト：www.thelivesmedia.com
- ☆ E メール：editor@thelivesmedia.com
- ☆ QR コード：



同プロジェクトの他の作品

THE LIVES MEDIA による他の出版物もご覧いただけます：

- － 紅塵、金光 (Red Dust, Golden Light)
- － 政界引退後：その遺産 (After Power: The Legacy)

- 科学の黄昏と黎明 (Sunset and Sunrise of Science)
 - 本書
 - 紅の帳 (The Red Veil)
 - 時の以前の響き (Echoes Before Time)
 - 俗世間へ (Entering The World)
 - 最後の鐘 (The Last Bells)
 - 我々以前 (Before Us)
 - 千の人生 (Thousand Lives)
-

**この度はお手に取っていただき、誠にありがとうございます。
真実を探求するあなたの旅路に、神と仏の祝福が
あらんことを。**